被告団会議討論資料 ――――

医学闘争―2.1決戦の もたらした諸問題の整理に向けて

――2.1一周年に際し、この一年間の経過に関する自己総括的整理、および第二回公判闘争→冒頭陳述の為に――

☆はじめに　P.1

☆1、再び、我々は学生闘争をどのように闘い、何を獲得せんとしたのか？　P.2

☆2、闘いの不十分性と、総括をめぐる混乱の根拠は何か？　P.5

a、学生闘争の不十分性に関して　P.7

b、2.1以降の、いわゆる混乱・動揺・拡散について　P.12

☆3、第二回公判闘争に向けて―戦―被告団と公判闘争の位置位置全体像の確定の為に　P.21

☆付記　P.26

文責・

―<2.1医学決戦統一被告団>幹部

山崎 健

'73.4.11

同大学費闘争―2/1決戦のもたらした諸問題の整理に向けて――2/1一周年に際し、この一年間の経過に関する自己否定的整理、および第二回公判闘争→冒頭陳述の為に――

<はじめに>

まさにテルミドールとしかいいようのないこの時期にあって、困難な闘いを持続している諸兄、およびあの71～72年同大学生闘争―2/1決戦を英雄的に闘った仲間達――2/1一周年に際し、また第二回公判闘争に向けて、この間の経過を明らかにし、問われ続けている諸問題に対し、より真摯な整理と自己批判を提出したい。そして、わが「統一被告団」の革命的転換を共に克ち獲り、革命派のMの利益の一端を共有してゆきたいと思います。

いまこのようなかたちで文章を提出することに対し様々なところから批判があるのは当然です。私自身、一周も二周も遅れているとは思っているし、しかし一定程度、この一年有余問われている諸問題を整理しない限り、第二回公判以后の長期にわたる公判闘争も鋭角的になりえないとは、感覚的ながら考えています。2/1より一年間を経て、混乱や動揺、そして葛藤を繰り返しつつ、しかしそれらを主体的に自己切開し、対象化し、一歩ささやかに前進する為に、まだまだ不十分で未整理だけれども、いまは戦線を離れ市井の片隅に呻吟する2/1を闘った全ての同志、また、2/1の凝縮された所産（それ故に問題が渦まいている）たる「統一被告団」にたいして、問われている諸問題を整理する作業を再開し討論を再開していくささやかなきっかけにでもなれば、と思ってこの文章を提出する。出来うる限り、具体性に即して展開したつもりであるが、この一年間を経ても「実践的な総括」を克ち獲れず、「公判闘争」のイメージを確定しきれないという、つまり未だ后退局面を脱しきれない私(たち)の主体的な弱さが反映していることは免がれない。またそれが何に起因しているのかも明確にしきれていないということは、誰彼の指摘を待つまでもなく我々の前に現出しています。その様な情況を克服するという一定責任ある立場にありながら、それが出来ず、革命的現実主義の立場を放棄し、自らも混乱・動揺の深みに陥こんでいったという私自身の責任はなによりも、あくまでも階級的観点から当然責められうるべきものには違いありません。しかし、それだからといって自己批判と自己弾劾の円環に終始すればいいというのではなく、まずは「統一被告団」の当面抱えこんでいる諸問題に対し、最大限真摯に応えてゆくことをもって自らの足元を踏み固めてゆくことが問われているのではないだろうか？「再吟味」――このことは、いま私だけではなく、総体的にも問われていると思います。

私はこの文章の打成を三つの観点から整理してみた。――1.再び、我々は学生闘争をどのように闘い、何を獲得せんとしたのか？、2.闘いの不十分性と、総括をめぐる混乱の根拠は何か？、3.第二回公判闘争へ向けて――である。

この文章以前に、昨年三月に、極めて主観的・感情的な、しかし今からみれば以后の混乱の予言みたいになってしまった文章――「同大学生闘争に於いて、我々はどのように闘い、何を獲得せんとしたのか？」――を提出したが、それ以降、まともに学生闘争に関して言及した一片の文章も（もちろん一片の文章で即「総括」などとは言わない）コメント出来ないという発語の苦しみと、全くの混乱・動揺に陥ってしまった。そのような私自身の主体性や闘う意志の弱さ、革命的現実主義の放棄という、いわばインテリ的な作風が、学生闘争―2/1を闘った同志、我々の闘いを支持する多くの諸君の意欲を曇らせ、多くの仲間を戦線から失うのに輪をかけたことは全くの事実であり、このことに対してはいま真摯に自己批判するものです。しかしまた、この間の階級闘争の動き、「生きた現実」に触発され、苛立ちと焦りを感じつつ、自分もまた自らの混乱・動揺を克服し、自らのインテリ的な体質を一定程度自己切開できたときにはまた闘いのスクラムを組むことを夢想していたことも事実です。しかし、またやる気になったからといって無前提、無媒介的に戦線復帰ができる程、現実は甘くはないことは、少なからず闘いの血の海を経験したものなら、その闘いの対象化と総括が厳しく突きつけられ、それ抜きにはプラグマティクに何もやれないことからしてけだし当然です。

そして何よりも、私と私の言動に対する非難と不信感が予想よりも渦巻いていること、2/1当時共に信頼して斗った仲間を余りに多く失くしてしまっていること、そしてまた現在の階級斗争－反戦斗争の意識性と展開が私のそれよりもはるかに凌駕していること、等々が私の願望を打ち砕き、今后どの様な運動に関わるにしろ、学ヒ斗争－2/1を中心とするこの一年有余の諸問題の整理の必要性を私にもたらしたのです。

この文章はその一定程度の自己否定的な整理であり、これをバネになんとしてでも私自身に革命精神を復权し、来たるべき革命的危機に共にめぐり会う為に、出立していくつもりです。

1、再び、我々は学費闘争をどのように闘い、何を獲得せんとしたのか？

いまこのような問いを発することは、「血の2/1」を怒りをこめて振り返り、正史的遺産として学生運動史の一ページに定位せしめる為にも、決して無駄なことではないだろう。学ヒ斗争－2/1の斗いが、階級斗争総体からみればまだまだ小さな火花にすぎずとも、現在の学ヒ・学国斗争を担う部分がそれを教訓化し、我々の公判斗争の推移を見つめている中にあって、また今后の教育学国斗争の一つの視点としても、2/1に昇りつめた同大学ヒ斗争の全過程を明らかにし、その意义、内容、正当性を抽出すること、また更にそれらを公判斗争の全過程を通じて、全一的な思想性にまで物質化する作业のささやかな一部分でも担うことは、学ヒ斗争－2/1に於ける我々の位置に規定されて、いまでも一貫とした我々の任ムだ。まずそれをなしていくことが、「血の2/1」を担いつつもいまは戦線を去っていった同志達に対して応えてゆくことではないか。広く学生の即自的な思想的表現としてあった「値上げ反対」を、断片的な教育政策の把握ではなく資本制的分业形態の中で相造的に把え返し（いまから思えば、この点では不十分ではあったが――后述）、対权力へ相克から疑縫して、ブントの本質的な断絶を刻印したからこそ、我々の側に於いては〈革命的敗北主义〉を打ち鍛え、だが「最后の勝利」を胸にし全主体的力量を賭けて、更に全京都の斗う部分を結集し、大衆的な実力斗争として斗い抜かれた2/1決战は全くの广史的事实である。であるが故に2/1以降、総体的に非常な混乱、动揺と拡散が雪崩れをうっておこり、またそれに連赤問題に主に規定された革命運动総体の困難性が投影し、2/1以降の主体的な危机に更に輪をかけてきたといえると思う。我々はこの様な状態を「产みの苦しみ」として把え、わがものとし、主体的に自己切開し克服しようと確かに努力してきた。もちろん、2/1を他人事としたり彼岸におしやったり清算したりするのでは決してなく、また2/1を斗い抜いたものならそれが学ヒ斗争の「最后的」段階まで斗いを持続してきたことに規定されて「武器をとるべきではなかった」と誰もいわなかった。どの様な悪意あるデマゴギが横行し、斗いの成果を簒奪しようとする部分が登場しようとも、全共斗M以降の混迷と打ち破らんとする正史的インパクトである2/1の战斗を、革命的危机へ向けた革命的学生Mの广史的遺产として主体的に対象化し、斗いの永続化への隘路を切拓くことを前提的に了解して総括するという正しい態度をとろうとしたからこそ、逆になえって混乱の情況がおこってしまったと思う。このことをしっかりおさえ、闘われ続けている諸問題を整理してゆく必要があろう。

さて、具体的にみていこう――――――。

71年秋、三里塚－沖縄斗争を軸とした、69年以来の后退局面を一定突破する程の昂揚の中で、全国津々浦々の大学に於いては、学ヒ文化値上げという政府－教育ブントからの直接攻撃、文教収奪、反动的教育政策に抗して広範な学生Mの斗いがもりあがった。沖縄－三里塚斗争の様な全人民的な政治斗争であれ、学ヒ斗争の様な政治的要求を掲げた民主々义斗争であれ、また労働者階級による経済的要求を軸とする改良斗争、民主々义斗争であれ、簡単にいえば、資本制的隷属、その生产様式の要求する分業の圣域の中から、その支配のくびきを断ち切らんとして噴出、流动する斗いの根は同一であり、とりわけ帝国主义段階にあり、更なる反革命的再編、統合、侵略战争政策が「上からの国民統合、下からのファシズム意識の醸成」として益々精緻に進行している現在にあってはなおさらである。だからこそ、即自的な契机であれ（レーニンのいうように、この階級的情況を出点として、「一切の民主々义的要求のための斗争を、ブルジョアジーに対するプロレタリアートの直接の攻撃にまで、即ちブルジョアジーを収奪する社会主义革命にま

で拡大し、激成しなければならない」という目的意識性を持ち、それを「改良主義的にではなく、革命的にまとめあげ、実行しなければならない。ブルジョア合法性の枠に限定しないで、それを破壊し、議会主義的行動や口先の抗議に満足しないで、大衆を積極的に行動に引き入れる」為に、有機的連環をもって闘いを措定し、展開し、突破することもいとわなかったということを同志諸兄は了解できるでしょう。

もちろん我々はあくまでもプロレタリア革命運動の問題にまでひきあげて、階級闘争総体の利益の観点から、諸問題を整理し、更に実践的な結語へ接近・獲得していかねばならないし、また発生した不十分性を抽出し明らかにしていくことにもやぶさかであってはならない。このことが、我々が革命派として結語する場合の原則でもある。

生きた階級闘争の現実と、それに規定された支配階級による権力再編の動向――その性格を、断片的にではなく構造的に、適格に把え、階級性に適り、真に革命派の運動を代表するような、運動・組織の重層的・構造的な展開を行う実践的契機として、また真に革命的であるか否かを問う分岐として、「秋」の闘いがあったし、逆にいえば、9/16を軸とする三里塚闘争や、返還協定批准阻止の全人民的な闘いは我々にそういう点をリアルに突きつけていたのである。だから我々はそれらを必死で闘い抜いた。更に、71年夏の「ニクソン訪中声明」「新経済政策」の発表により、戦後世界体制を画期し、新たな再編期に突入し、そのような帝国主義の世界的危機に更に「左」から拍車をかけて闘うベトナム・インドシナを軸とする階級闘争の前進―「広さと深さ」の獲得に連帯・支持するものとして革命的左派の下に我々の闘い―学生闘争があったのである。

そうした主に秋の闘いのルツボを戦闘的に担い、その中で打ち鍛えられ、革命的熱意をもってバリケードのこちら側>に立ったものこそが、Brの闘争解体策動や右翼・反革命・日和見主義の登場を一切許すことなく、10/30自治会館突入を直接的契機とし、11/1対学長団交を突破口とする同文学生闘争をケン引したのである。問われたことは、断片的な教育政策のあれやこれやをつっつきあったり弱々しく反対の意志表示することではなく、土台そのものからの構造的な把握であり、全共闘の地平を継承しつつその敗北の根拠―即自性を止揚する豊かな団結―同盟の質を、政府―権力をめぐる闘いの中から獲得することであっただろう。その中で敵を知り、誰が味方であるのかを明らかにし、革命派の危機を克服し全体的な結合をはかり、Brに対しては鋭角的な武器となっていくこと――このようなことを意志一致し、いろいろの試みを行ったのではないか（その頂点は11/13人民と戦士の全国集会こそ最も意義あることであった）。もちろん我々は、学生値上げの意図するものが、今から思えば確かに不十分ではあれ、直接の文教収奪であると共に、それをメルクマールにバラ色の文同志社幻想へ至る教育の帝国主義的再編として把え、またその野望にとっての障害である同大における学生Mの位置に対する破壊・弾圧の強化としてあらわれてくるであろうとした。そしてBrの収拾策は入試を頂点として、㊥導入―バリケード撤去―ロックアウトとして、更には学館・寮に対しても強硬的に貫徹されてくるであろう。2/1早速、血の弾圧として襲撃を執行した。がしかし、遂にBrは我々の拠点＝学館・寮に対しては手をつけることができなかった。このことは、2/1の戦闘が、Brの破綻した教育政策とそれを統括するブルジョア教育秩序（文学）に対する実践的批判＝暴力的体現としてあり、更にこれ以上弾圧すれば一度放たれた火花はとどまるところをしらなくなるだろうという、Brにとって強迫観念を与えたことであり、学生闘争全過程で流動した多大の支持層を我々の側に引き寄せたことによる（宗教部の問題をみよ）。確かに、学生闘争を中心的に担った「最良のカードル」の大量逮捕や以後の混乱に規定されて、その「多大の支持層」に「放たれた火花」を投げつけ爆発させるところまで高めきれなかったけれども、2/1の戦闘が及びBrの文同志社幻想の過程の重大な関門として学生値上げが強行され非和解的な凝縮された対立点としてあったということに規定されて、文同志社幻想粉砕の闘いは開始されたということになる。そして、2/1に至るBrの動向を誰が支持したというのか、逆に我々の方に良心あるもの、誠実あるものを引き寄せただけではないか。また2/1における㊥の暴虐、無差別全員検挙はブル新さえ非難しており、このような㊥を数度にもわたって導入した山本ら同大官僚を誰が「同志社の良心」などというであろうか（更に、我々「統一被告団」は公判闘争の過程で、この山本らの犯罪性、反動性を無慈悲に暴露し糾弾し、文同志社幻想粉砕の闘いの橋頭堡とならなければならない）。

2.1の斗いは、ある日突然やって来たものではない。もし、ある日突然やって来たものとするならば、それはBrの動向に規定され、即自的な団結で、個々人バラバラの意志性で斗われたということになる。このことが根本的に誤っていることは2.1の戦斗を共有した同志なら了解できるでしょう。前にも述べてきたように、我々は私の斗いで打ち鍛えてきた。11.11闘争に於ける我々の追求、攻撃と圧伏的学生の決起、11.12当局の逃亡に対する膨大な学生の抗議、有終館、学生部の封鎖、占拠、教授の期限付、越冬体制の持続、9.13全学々生の圧伏的成功→無期限バリストの過程で、対権力との対峙関係を持続しつつ、活動家の定着化、戦線総体の意志の発展、「最後のカードル」＝突撃隊の獲得を経、極めて「計画された戦術」としてBrの利害と徹底的に対立し（バリケードという戦術形態自体、これは全共斗Mのときに確認されてきたことだが、Brの秩序体系を占拠、妨害し、入試という大学秩序のいわゆる「出して入れる」というサイクルの開始の直前にあってはなおさらだ）、「値上げ阻止」を誰よりも最も体現し、Brに対する鋭角的な武器として、2.1の戦斗が計画的に行使されたということである。ここに於いて、我々は広範な支持層を背景に、<バリケードのこちら側>に結集してくる部分の意志の発展を基礎にしたのである。「人民の意志の発展こそが、我々の全活動の基礎である」ということは、学生斗争のみならず我々が依拠し教訓化してきたことである。酷寒一月のバリケードは我々の潜在的な豊かな戦斗性をそうした観点から生成し、革命的敗北主義の手に、練り上げるような突撃の意志一致と、実際に武器を持った訓練を生き生きと克ち獲った点に最大の意義がある。更に、全国の学生斗争がこの時期には分化、霧散したことを考えるならば、2.1までの斗いを持続したものはなによりも失ってはならなかった貴重な「最後のカードル」であった。同じ学生斗争はそのような部分、また多大の支持層を多く生み出した、そのことは積極的に評価せねばならないとともに、そのような本来失ってはならない部分を2.1以后の総体的な混乱の中で失っていった運動相違（これこそ学生斗争で止揚・解決することを意志一致したのではなかったか？）と指導の危機をこそ負の面として明らかにすることが問われていた（2.1以后）のではないか、それを我々は2.1以降、ヤッタヤッタで忘れかけなかったのではないだろうか？

当初から我々は60年代后半の教育学園斗争の成果なり到達した地平を継承、発展させようとし、とりわけ中大学生斗争を教訓化したけれども、決して無前提的にアナロジーしはしなかった（この頃の中核派の「オミ江大学斗争論」や革マル派の早稲田「学生斗争」などまったくプラグマティックな対応を想起せよ）。それは70年代が、60年代のような急進民主々義（一斗争）の時代ではもはやなく、一度は武装解除され、学園は封じ込められているという情況があり、直観的にも、我々はそのような時代認識を持ったからである。60年代の教育学園斗争の一つの特徴は、寮の改善要求や医局の民主化、学生・学館斗争でも、それらがすぐれて学園内の斗いという性格をもっていても、くすぶればすぐ明日には全学に拡がり、そういった問題をもついくつかの大学が集って地区的な結合を呼び、更にストレートに全国的な拡がりを求められ、更に安保や沖縄をめぐる全人民的斗争と合流し、中央権力斗争へというイメージがあり、実際そのようにして斗われてきた。戦后民主々義の延長線上にあったこの時期には、まだ反対の政治利害でも一定許容する程、権力実体のルーズな面をもっていた。だが破防法一大学立法の発効で「敗北」させられ、それ以后の混迷化にある現在ではそうしたパターンは、革命的危機が訪れない限り、ないということを承認したであろう。これに加え、革命派総体の危機的情況で、実際我々の斗いは困難な中で展開されたのである。そのような中でも、同じ学生斗争は全国のそれの頂点であったし、京学連の統一行動を媒介に京都ー関西における一定の結合を克ち獲ったことは事実であるし、11.13東大安田前における人民と戦士の全国集会や11.14中部五大学共斗との統一行動やそれ以后の首都での斗いなどで首都ー全国の斗う部分との結合を、60年代とは独自の仕方で、追求したこと――そのように多多の試みを結び1～2月の斗いに備えたのである。2.1の我々の斗いは、2.11全関西大集会を一千名余で圧伏的に成功させ（沖縄同のアッピールあり）、電大パトカー襲撃斗争のインパクトとなり、京大・阪大へ波及し、富山大入試粉砕斗争などの基盤となったし、それらの斗いを担った部分が我々の斗いを教訓化し、触発されていたことを承認できるだろう。

そのように、全国的・全面的に結合・発展こそできなかった（后述）が、多くの斗う部分に熱っぽいインパクトを与え、一定程度波及・結合し、全共斗Mから70年代中ー后半への革命的学生Mの橋頭堡として、同じ学生斗争ー2.1決

戦を位置するということは全く正当な評価である。

2/1の戦闘を自ら血を流して闘い、最后まで闘った多くの同志が、あの全共闘M(および世界的叛乱)の熱気をわがものとし、「全世界を獲得する為に」という日本革命的左派出生以来の思想性、戦闘性を堅持し、更には「70年代の赤い星」を見る為に、酷寒のバリケードを持続し、突貫し、獄中の炎を燃やし続けていたに違いない。このことを私(たち)は決して忘れるものではない。

しかし、そのような本来失ってはならない人達を2/1以降失ってしまったことに対し、我々「統一被告団」はその負債を自らのものとしてひきうけ、公判闘争を最后まで2/1の永続化として貫徹することが、そのような人達に応えていくことだと思います。同志奪還闘争—2/1決戦において、「我々はどのように闘い、何を獲得せんとしたのか?」という問題意識を凝縮しながら、我々は一年前の冬—「血の2/1」を怒りを込めて振り返らねばならない。

以上のことは、これまでも我々の作業の中で確認し、全くの正当的事実であるが、このことを前提的に把え返していくことは必要なことだろうと思います。

2. 闘いの不十分性と、総括をめぐる混乱の根拠は何か?——

闘いの不十分性と、総括をめぐる混乱が、2/1直后から一挙的に顕在化し、それが3〜7月あたりまで真に克服できなかった。そしてこの時期は、いわゆる「奪還闘争の永続化」の重大な客体としてあり、それに接近したことを考えるならば、一定私の問題意識を明らかにしておく必要がある。これを前提にして、上記の問題に関して述べる。

我々が自己(および我々のM)を革命派として位置せしめ、同志奪還闘争—2/1決戦を革命派のものと自負する限り、闘いの当為、持続の根拠や不十分性の指摘、そして問われた諸問題の整理などを行うにあたっては、我々の依って立つ立場、思想的立脚点、依拠すべき党派性を、プロレタリア革命過程をめぐる総体性の中から、またそこまで引きあげて、そして階級性と科学性の統一=全体性の中から切開し、抽出し、把え返していくという観点を持ち、出来うる限りそれに接近すべきである。そうでないと、結果からみてあれやこれやと意味付与やつっつき合いという悪無限的な傾向に足元をすくわれたり、3〜7月の過程でもよくおちこんだのだが、現在の情況を固定化して時期尚早論になってしまう。すなわち簡単にいえば、我々は一定の政治的経験と政治的意識性を経ており、また2/1決戦は一定解決・止揚されるべき不十分性を有しつつも、あのプレハーノフ流の「武器をとるべきではなかった」ということではおし流してしまえない諸問題を含しているのであり、それらをあくまでも「階級的だったのか、否か」という観点の下に検証し、対象化していくことだと思う。この階級性ということを、獄中でも、3〜7月の重大な時期にも、私自身見失っていた気がするし、戦線党体としても不明確だったのではないだろうか。(このことに関しては、私自身がこれ以上述べるよりも、「モスクワ蜂起の教訓」、「1905年の革命」両論文を参照して下さい。)

7月一年間の闘いを経、2/1に収斂つめた中で、以上の様な観点から永続化の客体として不十分性を抽出し克服し、本来踏み固めるべきものを踏み固め、闘いの過程で結集し定着した部分を革命的にきたえあげ、それらを打ち鍛えてゆく大切な時期が、2/1直后から丁度1年あたりの時期だったと思う。それが本当になしえてきたのかということが私の問題意識である。一人一人は、今から考えても相当に努力、苦闘していたにも拘らず、[illegible]におちいっていったということは何に起因しているのだろうか?

酷寒のバリケードを持続し、2/1を戦闘的・英雄的に打ち抜きつつも、2/1直后からこの一年間、多くの同志・友人が混乱・動揺に陥ったり、戦線から離脱・拡散していくという悪無限的傾向があることを私(たち)は自らの苦しみとして知っており、私自身戦線にあったときでもその様なことが二重写しされて投影され、苛立ちを覚えたりつつも、自らもその渦巻に陥ってしまった。先日の2/1一周年の闘いに於いても、わが最良の友人たちを余りに失いすぎていることを、残念ながら認めないわけにはいかなかった。いま、その様なことを抜きにしては、少くとも奪還闘争—2/1を担い、公判を関わっていこうとするものには、何も語れないように思う。

我々は確かに不十分性を有しつつ、また密度の濃淡がありつつも、ひとしく革命的気分を抱き、正しい道を歩んできたし、多くの同志達は自ら血を流し奮闘し、敵権力に捕われることも敢えていとわなかった。しかし、何故、2.1以降の軌跡が否定的なものとしてあり、失ってはならない多くの最良の同志達を失い、踏み固めるべきものを見失ってしまったのか、それらは当然、公判闘争「統一被告団」にも反映している。

このようなことに運動構造や指導の危機という観点も含め総体的に応えきっていなかったことを、2.1から夏あたりの時期の痛苦な反省として私はとらえている。これは私だけの問題ではないと思うが。そして、ただでさえ混乱しているものに、「誰彼が悪い」式のリゴリズムや、個々人の主体性、政治性、革命的熱意などの一般的有無に帰していったりする事、それでもって十把一ならげにしてしまったことが果たしてなかったか。また、なにかしら何かあたりさわりのないことをやっていれば「政治性」を付与する傾向（2.1を闘ったものなら、問われた諸問題を整理し、それに応えない限りMの系統性は喪失してしまうと思う）が果たしてなかっただろうか？それらが問われている問題に本当に応えきっていないばかりか、2.1以降の混乱の情況を克服し学生闘争の「実践的な総括」を獲得していくということを遠ざけるばかりであることが、いまになってやっと本当にわかってきた。なぜなら、革命派が革命派たる所以は、「運動の未来を代表する」ような思想性を、運動（一体）を媒介に、総括過程の中から獲得することにあり、それを踏台として闘いの総括を正史的遺産にまで高めあげることにあるのだから。

率直に、我々は、仮に個々人の問題にしても、何故、何を根拠に一人一人が、主体性・政治性・熱意を喪失するに至ったのか、個々人の混乱・動揺は何に起因し、何によって規定されているのか、ということからはじめねばならない。

2.1以降の否定的情況、とりもなおさず2.1を闘った多くの同志・友人たちの混乱・動揺は、学生闘争がもたらした諸問題の整理→総括の環の不鮮明さ、さらにその上に、当面するプロレタリア革命過程総体に規定され、革命的左派の危機的情況、理論的・実践的体質が反映していることからきているのではないだろうか。そして、理論と実践の統一＝全体性の問題（すなわち、対象把握が革命的実践を呼び起こし、所Q性と科学性の統一をそれを媒介に止揚・獲得していくこと）を、明確な歴史的事実に即し、かって獲得した地平とまた不十分だった諸問題と絡み合わせ、検証し、対象化し、獲得していくという運動構造が不十分だったのではなかったのか。その様な問題をこそとりあげるべきだったのではないだろうか？

ちなみに、このことは60年代後半の昂揚を担った無名・無数の戦士のバリケード解除后の拡散（これが即自的団結と我々がいってきたものであり、こそこそ向自的なものに止揚しようとしたのに）、また諸党派、諸グループの崩壊、分散も決して偶然ではなく、とりわけ71年秋沖縄一学生闘争の全国的不十分性一連帯問題の后の、広く革命的左派の下で闘いを担った部分のそれらは、当面するプロレタリア革命過程総体に規定され、未だ歴史的に若い革命的左派の体質が色濃く反映していることに注目せねばならない。

その様に、我々も（当然、「統一被告団」も）そうしたことに少なからず自由ではなかったし、更に権力・ブルジョアジーの攻撃の十字砲火（分割公判策もその手はじめだ）にくぎづけされた困難さの中で、問われ続けている諸問題の整理をはかり、「統一被告団」としてそれに応えていくことを第二回公判闘争へ向けた当面する獲得目標であらねばならないであろう。

以上のことを前提的な問題意識とした上で、以下二点に分け、もちろん本質的には、問われている諸問題を整理し全一的な思想性を物質化していくという観点では一つのことですが、若干述べていきたいと思います。

a. 学費闘争の不十分性に関して

不十分性を明らかにすることは決して闘いを清算することではなく、1で述べてきた点と関連させ、我々が闘いを準備し、正しい道を遂行する中であらわれたことである。しかしこのことが闘いの最中には权力Bとの「外的な対立」に規定されて気づかず、2.1以降一挙的に顕在化し、このことが混乱の情況の一つの原因となっている。2.1における中心的活動家の大量逮捕、「外」に残った諸君は救対活動に追われ正しく処理されてこなかった、だから4月からの運動に一つの溝をつくってしまったと思う。不十分性を教訓化することは、今后「公判闘争」を遂行するにしても、また他の闘いを担うにしても意義あることであろう。ここにおいても、「なにも時期尚早のストライキをはじめることはなかったとか、『武器をとるべきではなかった』とかいう日和見主義者がこぞってとびついた、あのプレハーノフの見解ほど、近視眼的なものはないのである。それどころか、もっと決然と、もっと精力的に、またもっと攻勢的に、武器をとるべきであった。」という前提を確認しておく必要があろう。更に、学生闘争の連続線上にあった、2.1直后からの情況をみていくとき、「日ソ革命(無期バリ→2.1)の偉大な数日の教訓を自分のものにしながら、われわれの活動をさらにひろく展開し、われわれの任務をさらに大胆に提起しよう」ということがなしきれてきたのかという観点から、「どんな条件のもとでも、いつもかわらないわれわれの日常の義務を無内容にもひきあいに出して、当面のこの特別の任務、現在の闘争形態のこの特殊な任務を回避することはすまい。」という観点からみていくことが実は問われていたのではないか。(以上引用は「モスクワ蜂起の教訓」から)

さて、学生闘争の不十分性に関して、唯一のことは、全国的、より「広さと深さ」をもった結合を克ち獲れなかった、そして結合の環を見失った、ということである。これは学生闘争が広範に全国津々浦々の大学で闘われたということは前述し全くの事実であり、一定波及したことも確かである。またこの時期、沖縄―三里塚をめぐる闘いが昂揚し、さらに賃金奴隷制と帝国主義労働Mの奥深くから春闘をメルクマールに労働者階級の闘いが噴出してきた(内灘の闘いを想起しよう)。この様なことに対し、更にどの様に結合し、どの様に革命的にまとめきっていくのか、ということが明確にできえなかったということである。これは何に起因しているのだろうか?もちろん、前にも述べたように、当面する階級情勢に規定されていることはいうまでもないが、とともに、実際に闘いを担った闘いの主体としての観点から追求していくことが問われるのだ(否、問われていたと言ったがよいのかもしれない。「学生闘争の永続化への客体」としての時期(2.1〜7月)に以下のことは明らかにし克服すべきだったのである)。

まず第一点目に、权力問題の把握=情勢の分析―実践の総合・系統化の不十分性である。学生闘争前夜、世界がドル・中国問題(ニクソンの二つの声明)により、新たな再編成の段階に突入し、更に沖縄返還協定批准と絡み、それらを軸とし、また高度成長政策―金融寡頭制の蓄積以来の矛盾の激化(物価、公害etc)などによるブルジョア政治委員会内部の動揺・矛盾の露呈が顕在化し、それに対する総体的な把握の不十分性が、たとえば「佐藤政府打倒」のスローガンに対する理論―実践的態度にもあらわれたように、みられたと思う。また、よく言ってきた様に、学生闘争は単に一学園の矛盾として収束できない多くの問題を含んでいるばかりでなく、沖縄―三里塚闘争との連環をもって闘わねばならないということは正しく、これまで確認してきた訳であるが、それらに更に派兵や田辺町移転などの課題との有機的な連環の軸が明確化しえず、更に言えば、いくつかの目に見える主題を排本する傾向に不断に足元をすくわれていった、ということを敢えて否定しない。(ちなみに、2.1を経て、「当面の特別の任務」に我々総体として十分に応えきれなかったことでこの傾向が再生産されてしまったと思う。このようなことは、誤解を恐れずいうならば、当時の我々のMが新たな重層的なそれに向けての過渡的形態としていわれてきたように、情勢に触発された様々な意識の部分を含んで展開され、ゆるやかな原則的な連合を形成し、いまだプロレタリア革命の問題に接近するという命題を闘争の俎上にのぼらせることができなかった。これには我々の当時の党派アレルギーからもたらされた理論アパシーの悪しき面である。しかしその様なことを全面的に否定しているのでは決してなく、沖縄―三里塚闘争への、自らを革命派と規定しての、積極的な関わりを通して、個別闘争と全人民的闘争の結合を目指し、学生闘争を最后まで闘い抜

くという前提の下に、運動の重層的な構造を見ち獲っていくという組織再編のイメージを出し、これを意志一致した。そして実際に、多くの同志たちの献身性、自己犠牲性により、我々は自ら中心的な活動家として、その斗いの過程で一定程度の政治的経験と政治的意志性を獲得した（これは一人一人においてそうであるとともに、総体的にも全くそうである。だからこそ1～2月の斗いが斗えたのであり、2.1以降はそれを踏み固め、一歩飛躍の客観的な時期としてあったのだ）。このことを否定するものは、当時中心的に活動した人のなら、誰もいないだろう。

第二点目に、そうした具体的な情勢の把握―系統化への不十分とともに、学生値上げの背景・意図の把握が、原則的な資本主義批判にまで切り込めなかったこと――。確かに、「帝国主義再編」の一般性を語り、資本主義の矛盾をあばくこれ（つつき、「労働力商品過程」として「学生存在」を捉えてきたが、更にそれ以上の、資本制的生産様式―分業形態＝数百のブルジョア的秩序を、剰余価値の生産→賃金奴隷制からの理論的捉え返すこととと、ブルジョア社会＝「国家―市民社会―大学―個人」とその交通形態、更にそこに於ける個別利害と共同利害、両者を統合する階級利害などの構造的な把握と分析、そのような観点から必然的に学生値上げの背景・意図を整理する（この作業は系統化への大切な一歩である）ということにまで踏み込むことが不十分だった。（この様な問題に対しては、時期尚早だとか、学生には出来っこない、と割切ってしまうか、中大学生斗争以来この様な問題を一応やりきったブントの分解や60年代新左翼に一定「視点」を与えてきた中核派の後退などをみて情性主義的になってしまうからだ。）更に、高度成長政策以来の矛盾の露呈である公共料金の値上げとともに、二重・三重の大衆、とりわけ中産階級からの収奪という構造を理解しえなかった。

以上の二点は、対象把握の問題であるが、これに関連して、学生の（日常的）個別利害という、我々が斗いの過程で突き当たった問題について、ここで若干みてみよう。

結論から先に述べれば、この層としての学生と、その個別利害・特殊利害の、分業に於ける明確な位置を十分に追求できず、反対にそれらを固定化して捉えるという傾向に陥ったということ、だからこそ、我々の運動に於ける獲得目標―〈それらの個別利害、特殊利害を統合するBrの階級利害を、イデオロギー―思想的に下から突きくずし、土台の置き換えをめざすという目的意志性〉として普遍化できなかったのではないだろうか。すなわち、我々は斗いの最初から、あれやこれやの断片的政策としてではなく、もっと構造的な斗い方をしなければバリケードの風化・解体は目に視えていると直観的にしろ感じていたではないか。いま問題を俎上にのぼせたいのは、この学生（層）の日常的な個別利害、特殊利害が、「精神的活動と物質的活動、享受と労働、生産と消費が、別々の個人に属する可能性が、いやむしろ現実性が生じる」（ド・イデ）分業というブル社会を構成する物質的諸関係の基底的要因から、どこに位置し、それらをどのような思想性、イデオロギー的内容でもって分裂―解体させ、更にBrの階級利害の側にではなく、革命的なプロレタリアヘゲモニーの側に引き寄せ、分業生産のマヒ（具体的戦術としての占拠―バリケード・ストライキ）の斗いの為に整えてやるのか、否実践そのように したのかということだ。「大学」は資本制的生産様式―その基底的要因たる分業の貫徹し、矛盾の累積する（だからまた「学生は社会でもっとも敏感な存在である」）ところであるから、学生斗争といういわゆる個別斗争では、「改良の果実」それ自体を自己目的的に追求してはならないし、また上述した問題を、いわゆる「運動至上主義」を「イチヅクの葉」としてもならない。だから、「改良の果実」の獲得していく過程が、即ち、資本制的生産様式―分業を解体・止揚していく運動としてなければならず、そこに於いてく問題意志の凝縮→目的意志性〉を獲得しなければならないのである。そして、日常的な宣伝、暴露、煽動などの活動も、「運動至上主義」（このことについては言葉尻ではなく、『マルクス主義と修正主義』を参照のこと。）に溶解させるのではなく、運動に於ける獲得目標としての目的意志性の中に位置づけられねばならない。また、個別斗争や、自然発生的な運動の盛り上りも、バラバラにそれだけのものとしてしまうのではなく、革命過程という全体性の中に位置づけ、上向せしめていかねばならなかったのではないだろうか。そうでない限り、「大学」の中で反発し不満を持って部分的に斗い出しても、分業というBrの物質的諸関係の中で、所詮、小ブルの観念の溶解として、「何に対して斗うのか？」を明らかにしえずあえなく敗北してしまうか（昨年4月―時期の重大さを想起せよ―における学教部の問題は全くそうだ！）、

そのトブルの観念の蔓延になにかしらラディカリズムを付与しても、「コップの中の嵐」として収束してしまうのだ。何故なら、文学は既に「国家の為の文学」として立場通り封じ込められているからであり、だからこそ土台と権力そのものを問題にしなければ、そのような対象把握、手の打ちようをしなければならなかったのではないのか、それがよくも悪くも、もろに投げつけられたのはとりもなおさず2.1をめぐる数日間だったのではないだろうか(問われるべきは、それを真に対象化し得なかったことだ)。

そのようなことは、たとえば「値上げ反対、しかしバリストも反対」,「値上げ反対、しかしレポートがあるなら——」などの表現に端的に表われている学生(層)の日常的な個別的・特殊的利害をどのように貫ぬき、観念の上でどっちにいこうかと逡巡している即自的意識をどのように<現実>に引きずり込むのか、ということとも密接に関係している。何故なら、そのような学生(層)の利害や意識は、同志社文学という、ブルジョア教育機関—労働力商品生産社会内にある限り起こることであり、それが分業の中でバラバラにされたところで個別的に相対立し、また即自的には学費値上げという文学の共同利害とも相容れないけれども、しかし意識の上では「かくあるべき——」,「それにかわるべき——」(それらの言辞はいつも本質を隠蔽する常套句だ!)という共同幻想で統一の志向をもち、現実にはB+の階級利害によって統合される。(このようなことは、学費闘争の全過程を経験したものなら、たとえ現象的にみてもわかることでしょう。)

だから、そうした構造、ブルジョア(教育)機関総体に鋭角的に切り込んでいくには、よし、政治内容の明確化と全一的な思想性への接近、そしてそれらの基準の設定を結集軸としてなしていくことが、あくまでも運動構造の問題から、必要だったのではないだろうか。このような作業を十分に通しきることを前提にしないで、ストレートに「総括過程」——むしろ要無限的にアレコレの「革命的」意味を与えることが「総括」としてとり扱えられた——にいったから必然的に混乱が幾重にも輪をかけて発生したと思う。闘いの連続性とは、そうした闘いの中で生み出された内的矛盾や問われた諸問題を抽出し、それを「まず自分がやらなければならない」式のこっとりばやい仕方や左翼インテリの著作から部分のいいところだけを密輸入してアテハメるのではなく、<運動における主体的原理>にまで上昇させていくことであると思う。

もちろん前提的了解点は、「どのように闘ったのか」であり、その闘いの中でつかみとった政治的経験と意識性を対象化すること、また我々の闘いがまだまだ小さくとも、生み出された内的矛盾、問われた諸問題を、かつてレーニンがやったように(それは歴史的遺産として多大の文献が我々の前にある)教訓化することである。

ちなみに、ここで<問題意識>ということと、<目的意識性>ということについて少しくことわっておかねばならない。それは<問題意識>や<目的意識性>ということが、あれやこれやの思いつきや「革命的」意味付与として不断にせばめられる傾向があるからだ。なにかしら、ああだ、こうだと部分的にあげつらい、際限なく突っきあい、それでもっていくら「討論」しようとも、それらをいくら「総合」しようとも、それはまたまた言葉屑のとりあいになったり、いがみあいになったり、またどっちかが圧殺するのだ。<問題意識>とはそんなものか?そうなら、アレも「問題意識」,コレも「問題意識」,なにかしら「政治性」を付与すれば「目的意識性」になってしまう。違う。我々はよく次の様な誤りを犯した。一定の活動を経て、いわゆる「消耗」した人に対して、やっと何か話してくれた後で、その人個人の「主体性」をストレートに引き合いに出して、「そのような問題意識があるならなんでやらないのか」,また逆に、「それ位の問題意識しかないのに、大きいことをいう前になんかやったらどうなんや」といってその人の「消耗」に輪をかけてきた。そのような言辞にみられる「問題意識」とは一体何なのか?また目的意識性という言葉もあまりに安易に使われてきた。この最もいい例(だから教訓化することがその直後問われた)は、11/11闘争—11/18に於ける我々の予想をはるかに上まわった学生の政治過程への登場という事態である。ここで一時的ではあれ我々がのりこえられ、少なからず動揺があったが、当時運動の主流派であった我々に投げつけられた問題として応えていくのではなく、「大衆の自然発生性に拝跪するのではなく、目的意識的にやらなければならない」ということ——それ自体一般的には誤っていないが——でナデ切りしく傾向があったことを想起しよう。なんという「目的意識性」の捉え方の貧困だったことだ

5.5.1

実際、2.1を担った部分の中で、一度「消耗」した多くのものがどれだけ立ち直ったというのか？我々の闘いた結果し、参画した多くの部分をどれだけ「目的意識的に」まとめきり、組織化していったというのか？本当は逆だったのではなかったのではないだろうか。

レーニンが『何をなすべきか？』を書いた時代、ツアー権力の圧制下、嵐のように激しい労働者階級による自然発生的な闘いとその内部に於ける自然成長性と「経済主義的な指導部分の手工業性に対して、闘争の質的転換と「長期を見こした系統的な活動」という観点から、〈目的意識性〉ということを対置したのであり、さらにいわゆる「外部から」階級的・政治的意識をもたら（（中国革命における「革命的反戦運動の持ち込み」を想起せよ！）、プロレタリアートを経済闘争の狭い枠ー行動領域からひきはなし、他の諸階級と結合させること（レーニンが再三再四言っている「革命的理論なくして革命的運動はありえない」という意味はここにある）、さらにそれらを統合するものとして〈環〉を設定した。しかし二元論的に、だから自然発生性が即悪くて、目的意識性が即善いとかいうのではなくて、自然発生性は目的意識性の萌芽だとして、「計画としての戦術」を措定したのではなかったか。しかしそれでも1905年モスクワ蜂起には敗北したのだ。簡単にいえば、〈目的意識性〉とは、一定の政治的経験と政治的意識性を傷つき血を流すことを代償として踏まえたならば、それを闘いの当為として教訓化し、プロレタリア革命過程のささやかな接近を、その総括過程にのぼせることであり、階級性ー唯物史観に下向し、プロレタリア革命過程ー革命的危機に上向せしめ、それらを相互媒介として相互的に階級闘争の場に表現することであり、〈問題意識〉とは、〈目的意識性〉へ凝縮さるべき対象的世界認識（ー活動）に他ならないであろう。そうでない限り、〈目的意識性〉は全くバラバラの恣意的なコジツケや「革命的」意味付与におとしめられてしまうだろう、意図するしないにかかわらず。また〈目的意識性〉が明確化しえないならば、プロレタリアートによる自然発生的な民主々義闘争が激化したときに、〈最大限綱領（ー的闘争）ー最小限綱領（ー的闘争）〉の区別と連環を混同してしまうに違いない。このことは当面する我々の「公判闘争」についても全くあてはまる。即自的に当局の反動性を追求しても、〈目的意識性〉に立脚した獲得目標として措定しえぬ限り、方向性を見失うであろう。あれこれの思いつきや意味付与を並べたてたり、てっとりばやく左翼インテリの著作にとびついても、それが決して悪意からでなくとも、「地獄への道は善意で敷きつめられている」ということ、それよりも、またこれは我々に最も欠けていたことだが、レーニンの苦闘、とりわけ敗北の総括、矛盾の解決の仕方から学び、教訓化することは、学生闘争の諸問題を整理する作業にとっても、決して無駄なことではないだろう。何故なら、学生闘争ー2.1は対象化されるべき内容を有しているのであり、それだからこそ逆に様々の混乱・動揺・拡散が生みだされたのだから。ちなみに、『何から始めるべきか？』で、「現在の瞬間におけるわれわれのスローガンが『突撃せよ』ではありえず、『敵の要塞の規則だった包囲を組織せよ』であるべきだということは、われわれの闘争の一般的諸条件を概観する能力をもち、諸事件の歴史的経過のいかなる『転換』にさいしてもこの一般的諸条件を忘れないすべての人々にとって、明らかでなければならない」と述べ、問題になっていることは、「どの道をえらぶかということではなく、一定の道にそってわれわれは実践的な歩みを、まさにどのようにすすめるべきか、ということである。問題になっていることは実践活動の方式と計画のことである。そして闘争の性格と方法という、実践的な党にとってのこの基本的な問題が、われわれのあいだではいまなお未解決のままになっており、いまでも重大な意見の相違を引きおこしており、それによって悲しむべき思想の不安定と動揺があらわれていることを、認めなければならない。一方では、政治的な組織と運動の活動を切りちぢめ狭めようと努める『経済主義的』傾向は、まだ決して死滅していない。他方では、新しい『風潮』の一つひとつを模倣し、その瞬間の必要を全体としての運動の基本的任務と恒常的な必要から区別することのできない無原則的な折衷主義の傾向が、あいかわらず大手を振って歩いている」と、『何をなすべきか？』の、いわば下書きとして問題提起しているが、しかしなんと2.1以降の我々の情況を照らし出してくれていることだろうか？これ以上私が述べるまでもないだろう。ただ、問題を喚起するのみだ。

以上の展開に、非常に直感的で未だ把えきれていないが、今后討論の余地のある点として、若干付け加えておきたいと思います。

第一点に、1/11～18の中で膨大な学生の結集が、確かに一定の目的であり、学生としての倫理感や道義性からではあっても、大学というブルジョア的な共同体(一意訟)の枠を突破し以后の一定の基盤が醸成された、そして12月の当面の全面休校処分という分断政策へと至る過程で、そのような情況の分析に少なからずとまどい、我々が一定程度立ち遅れたのではないのかということ、それを我々がどのように主体的に把え、如何に克服し、戦術を計画的、系統的に措定したのかということ、さらに意図するしないにかかわらずこの時期実践的立場を真にどのように明らかに表現したのか、を感じる。確かに、12月以降の越冬体制構築の中で一定克服しえたが。

第二点に、2.1～11の、斗いの永続化への接点の貴重な時期、既に后の情況への契機がはらまれてしまったのではないだろうか？3月からも、この時期のことについて我々が語りえなかったことは実に決定的だった。ここで問われるのは「外」に残った部分、といわけ指導的な部分、中心的に活動した部分がどのような内容の討論・論争をおこない、2.1の総括を戦斗の永続化へ向けて抱めたのか、ということだろう。このことはガ箱の中に一片の総括をめぐる文書も提起されず、またガ箱を出てからもしばらく明らかにされなかったことを想起しよう。こういうことは決して精力的だった救対活動をやぶさかにするものではない。ちなみにこの時期、唯一提出された(差し入れはなかったが)学術団の諸君のパンフは、日々拡散していく情況に対する危機感があり、学ヒ斗争の経過・意義等を確認していこうという試みと作業分担がみられるが、まだまだ深化されているとはいえない。しかし、発想としてはいいことであるが、こういうことが全体化されなかったのは何故だろうか？既にそのようなところに斗いの永続化への一つの溝ができてしまったということは、果たして戦線を離れてしまったものには言うことは許されぬことであろうか？

以上展開してきたような学ヒ斗争の不十分性は、同大学ヒ斗争もそれ個別としてあるのではなく、65年早大慶応の昇場と明大の敗北、67年中大学ヒ・学館斗争の勝利的展開→東大・日大→全国教育学園斗争へと至るひとつ全体的な流れと、69年秋大学Ⅱ法バリケード武装解除以降の主体的混迷に規定されていることから自由ではなかったので あり、全共斗M以后の教育学園斗争の一端を担い70年代昇場への橋頭堡として我々は斗い抜いたのだ。その全共斗M以后の混迷にいまなお新左翼党体が陥ったままであり(このことが今年度の首都における学ヒ斗争が盛り上がりを欠いている要因でもある)、このことを我々は意図的に突破しようとしたが、だが無前提、無原則的に60年代后半にアナクロ化したり回帰したりしようなどしなかったことは、2.1の戦斗行為をみれば了解できるに違いない。強いて二つに分ければ、継承発展させるべき主体的規定性(学生M・革命Mのひとつ全体的な流れ)と、突破すべき客体的規定性(主体的な混迷)を、どのように運動に於いて対象化していくのか、の一点に我々の学ヒ斗争の出発点があっただろうし、その為に意訟的にいろんな試みや錯誤を行いつつ革命的少数派という細流から「大道へ！」と突き進む(実際、我々はそのようなことを考えていた)中で不十分性は発生したのであり、2.1の戦斗でこの規定性ということが問われながら、それを以后の総括過程に我々が解き放ちえなかったところにこの一年有余にわたる、未だ問題点を整理しきれないという否定的な情況がある。この規定性ということに関してさらにいえば、それはとりもなおさず、資本制における諸矛盾が累積し噴出してくれば現実性として我々に迫ってきて(具体的には、B-からの狂暴の政策や弾圧などの攻撃がかけられてくるが)、だから反対に転化すべきものとしてその危機の最高の成熟を「革命的情勢」とし、ここは呼んだわけだが、そこでそうした資本制の諸矛盾・腐朽性という迫りくる現実性を革命的危機にまで迫っていくという目的意訟性一全一的な思想性が我々の側に問われざるをえない。なぜなら、主体的にも、客体的にも、また現実性ということからも、至るところからまさに相違的といえるほど運動における我々は針づけされているのであり、目的意訟性一全一的な思想性なしには確実に足元をすくわれるからである。この規定性ということを、いわば革命の意味として解明していかねばならない。

さて、そうした規定性を運動において対象化していく為の意訟的な試みを遂行していくとき、我々は当時(71年秋)の一定の階級的昇場を迎えて一般的にはとらええていなかった。その三里塚・沖縄を中心環とする全人民的な斗いの昇場に助けられ、それに観念的に依拠し、また学園に持ちこみ、学ヒ斗争を通じて革命的左翼の学生Mを再編しよう

というだいそれた野望をも抱いたのだ(11月首都の斗い、1/13 人民と戦士の全国集会、中部五大学共斗・東大全共斗との接触、→京学連の連続的統一行動→中核部隊「突撃隊」の形成→2/1→2/11)。

そして、权力サイドの動向・权力実体は当然60年代とは全く異なり、必至に攻撃、弾圧、妨害も熾烈になるであろうとのイメージにより(破防法体制といわれるように、実際、我の弾圧をみれば予想できうることであった)、最大限の決意、英雄性、自己犠牲心、献身性を、革命的敗北主义の立場から、打ち鍛えることを対置し、バリケード内での意志一致を克ち獲ったと思います。だがしかし、全国的・全面的結合の不十分性や、斗いの昂揚から平時にかけてやってきたあの反动を考えるならば、まだまだ不十分性から自由ではありえなかったと思う。

とりわけ、权力問題の把握と原則的な資本主义批判は、付け刃的なものでは、革命的実践(それは全体性を獲得する媒介だ)を呼び起こす根拠と、斗いの全過程からの獲得目標が、何かしら小さいものに限られる傾向に至るだけでなく、新左翼出生の秘密であるラディカリズムの核心が揺らいでいくと思います。

2/1以降一年有余の軌跡の中で、私自らの斗いの契机が、プロレタリア革命に接近する仕方をまだ十分に表現したものではなく(だから、たとえば中大学上斗争の中で問われた諸問題——たとえば教育綱領の問題——、全共斗Mがもたらした地平と総括の視点を所Q性の観点から整理できなかった)、まだまだ小ブル的人主义に戦斗性を付与したぐらいのものでしかない自立主义・革命的ロマン主义の枠内にしかなかったこととあわせ、以上述べてきたようなことに気づいたのです。しかし、皮肉にも、斗いの中で気づくことができず、戦線から離れてからしか気づかなかったということは、確かに自らの活动の軸そのものを問い返し、自らの弱さの表われでもあるのだが——。

たとえ不十分性があるからといって、それだけをみて全てを否定しようというのではない。それ以上に、学上斗争—2/1決戦はいろんな、多くの対象化すべき内容をもっていたことはいうまでもないことである。このことは固執すべき共通の最底限認事柄だろうし、戦線を離れた今でも少くともゆずりわたせない点だと思っている。不十分性や問題点について多くを語ればなにかしら「敵対」しているようにいわれてきたが、学上斗争—2/1が大きな斗いだったことを思えば、それぐらい受け容れる度量ぐらいはある。あまり小さいところでピーピーいって、いがみあってきたから、枠そのものが狭いのに更に狭めてきたのではないだろうか?問い返すべきことは、まだ蔵としてあるのに、である。

b、2/1以降の、いわゆる混乱・动揺・拡散について ——

この章で展開することは、aで述べたことと本質的にははっきりと区別しにくいし、区別するまでもないことかもしれないが、できうる限り整理しやすくする為に敢えて分けてみたので重復するところも多い。しかし、2/1以降の混乱・动揺等も、学上斗争の不十分性として把え上向させていくことが正しいと思います。

2/1当時の、「突撃隊」を中心とする「最良のカードル」(指ド的部分・中心的活动家)の多くが、現在、戦線から拡散し、また何より私自身、4—7月、イデオロギー的な面も含め全てにわたり混乱・动揺に陥り、当然、小ブル的人主义・自由主义に毛のはえた活动態度に外化し、昨秋以降実际戦線から脱落している中にあって、2/1以降の混乱・动揺、問われた諸問題、とりわけ学上斗争の総括をめぐるそれらに関して語るとき非常な苦しみを伴う。しかし苦しみを伴わない総括は無きに等しいものであり、総括までいかなくとも、2/1を担った仲間たちの混乱に少しでもこたえ、そして当面する才二回公判斗争を革命派の利益の一端となりうるものとする為に、敢えて非難を恐れず整理してみようと考えます。もちろん、甘に学上斗争の正当性とその地平を清算せず、今后も広い所Q戦線の中に生きていくことを前提にし、学上斗争を担わなかった部分・秩序派・反动派などとは、明確な一線を画した上で語ることを確認し、心ある批判を待ちたいと思います。

この間の私に対する様々な批判を要約してみると、「学上斗争の地平を清算している」「今までの斗いを空白にしようというのか」「基盤が解体している」「合理化している」などが共通していわれ、また最も印象的だった「日和見主义」あるいは「組織日和見主义者」なる表現もあった。(そのような言葉は、斗いの高揚期にはいつも出てくるものだが、確か

に、私はたった一片の「総括」も出さずに脱落していったことを考えれば敢えてそれらを甘受しなければならないのかもしれない。だが、それは逆に自らの足元にもはね返ってくることは当然であり、そういった高踏を無媒介的にひん発することで、我々は多くの仲間を失ってきたというこの一年間の否定的な側面を想い起こそう。また、斗いの正当性・意義を全一的な思想性にまで物質化することを抜きにして、いわゆる消耗し動揺するんたちに、我々は「おまえどうするんや?」と問いつめてきたが、ただでさえ混乱にあるのに、どうして答えることができるというのか。もちろん、ノンポリや、穏健派、反対派、Z1を斗わなかった部分、対权力との対峙とは関係ない人々、日共などには、そういうことが一定の有効性を持つことがあるけれども、少くとも闘いを共有し闘いの厳しさを知ったものを、ほんの現象だけ見て、やってるかあれこれ判断はできない。)さらに、実際にZ1や羽田・三里塚斗争を全く斗わなかった人達さえも、混乱につけこって、尻尾をつかまえる程度の「批判」を行い、自らの斗わなかったことをスリ替え、歪曲的事実としてある学生斗争—Z1の正当性・意義さえも侵蝕してきている。そうすることで また私が戦線を離れた后、いろんな些小なウワサが流布しているし、かつては共に斗ったもの同志の小なみあいや反目を側から垣間みて「近親憎悪」などとおしゃべりしている人達がいることも知っている。敢えてそのような傾向性に反対し、少しでも訂正を求め、現在混乱が極まり分散化し地中深くに化し始めている中にあっては学生斗争がもたらした諸問題、とりもなおさず私に関する問題もまず「統一被告団」に於いて一定程度整理しておくことが手始めなのではないのだろうか。そうでない限り、なぜ「統一被告団」があるのか、作ったのか、という疑問がでてき、その存在の根拠を洗い直さねばならない。さらに「統一被告団」の形成→今日までの軌跡には学生斗争—Z1の諸問題が非常に多く反映しており、それが前章でも述べたように烈火の階級斗争、少くとも対权力との斗いの中から生成→混乱—分散したことを考えるならば、思想—政治的問題として抽出する必要がある。そのような作業を踏まえないなら、かつてZ1を斗ったのにあとに残すものは明らかにしえずエピソードしかなくなるであろうし、「統一被告団」の全体的な位置や任務—方向性「何をなすべきか?」—が曖昧におしやられる。

71年秋→Z1の政治情況が、言葉の正確な意味で蜂起の時期では決してなかったことは確かなことだが、我々主体に突撃することを容赦なく突きつめた、ひとつの政治決戦の秋だった。いま軽々しく「突撃」や決戦を叫ぶことは誤っているが、我々は決して決戦を避けなかったし、突撃することもいとわなかった。そのことは自負している。来たるべき大会戦—革命的危機に向し、バリケードのどちら側に位置するのか、ということを自らのものとすることができたからである。

誰が何といおうと我々はあらゆる孤立に耐え越冬体制でもって冬のバリケードを持続し抜き、Z1を決戦として斗い抜いたのであり、Z1以降問われ続けている諸問題は、この文章の最初から述べている様に、学生斗争—Z1を、何に対して、どのように斗い、何を獲得せんとしたのか、実際に何を獲得したのか、また不十分だったのは何だったのか、を抽出し、解決・止揚しようとすることである。そして、それらを整理し、学生斗争の正当性・意義を全一的な思想性にまで物質化することであり、また総括が真に実践的たりうるのはあくまでも糾弘(一詮)を媒介としてであり「生き生きとした豊かな運動として」(決していわゆる「運動至上主義」——運動が全てであり究極目標は無であるではない)なしきらねばならなかったのだが——。(総括—思想—運動—糾弘の問題、区別と連環について観念の上でも混沌としている。それらは果たして、「やる中からしか解決しない」のか? それなら、学生斗争—Z1をやってきて解決しえなかった問題は永遠に解決できないことになるではないか? 問題を解決するにはまたZ1のような斗いまで待たねばならないのだろうか? 「一度目は悲劇、二度目は喜劇」というではないか。この次、Z1を超えるような戦斗をやるときは少くとも思想性—政治内容において一歩飛躍がない限り(それも敗北の教訓化の過程を踏んだ上で)、それは運動主体の決定的脆弱性の表現でしかない意味をもちえなくなる。)そうした経緯から、自律的な運動軌道の中で生き生きとした実体をもったものとして現在「統一被告団」があるのではなく、Z1を中心的に担い、Z1のいわば凝縮された所産であるという出生の秘密をもちつつも(それ故に諸問題が反映しているのだが)、その全体像・位置が明らかにならず、構成メンバー一人一人の意識性もバラバラであることは否定しえない。しかし、だからこそ、今后の学生層に我々がささやかにでも遺産として残す為にも、また「公判斗争」の総括的な展開を進行していく為にも、

そうした諸問題を整理し、それに応えていく必要があろうし、さらにその作業の過程からもう一歩、革命の意味を発していきたいと思う。

確かに、Z1以降一年有余、Z1を担ったひとりひとりの活動家の努力を決して少しさえに値するものではないが、Z1以降問われ続けている諸問題とそれをめぐる総括、それらが明らかにしえず、また解決・止揚する契機・根拠が掌中にしえないところから、総体的な混乱・動揺・拡散が拡大再生産され、この間の軌跡は否定的なものとしてある。昨秋以降、私は戦線から離れて、学生闘争を最后まで領導した戦線内部でどの様な努力・作業がなされてきたのか、どの様な基調で戦線分解を再建してきたのか、に関しては直接的には知らないが、少くとも「統一被告団」にあっては依然としてまだまだ問われ続けている諸問題は整理されてはいない。(それは具体的には、第一回公判闘争以后の「統一」をめぐる我々の対応としてあらわれており、弁護団の論理に当初から反発しつつも半ば「容認」せざるをえなかったことにはからずもあらわれてしまった。)

さて、混乱・動揺の根拠をえぐる前提的事柄として、果たして問題点を運動総体から、その内的矛盾として普遍化して(この様な言葉が嫌いなら、整理して、といってもいい)把えようとしたのか、実際は現象だけをみて、殺切り型の、「把一からげでおしなべてこなかったか、ということだ。「まず自分がやらねばならない」式の主体性云々カンカン(それは「空撞の寓話」にある危険性をはらんでいる)と、日和見主義のレッテル張りはメダルの裏表として、問われている本質的な問題をおおい隠す「イチジクの葉」である。混乱・動揺の第一歩は、どのような基準で学生闘争—Z1およびそれがもたらした諸問題を整理していくのか、突破すべき現実性をどのように把握するのか、という点があいまいになったことにある。運動としてやっていくときには、その思想的基準なり立脚点が問われ、また必須の条件なのに、どこでどう諸個人の意識性なり主体性の問題にスリ替えられ、それが先に出てくるのか。これでは小つまりたっても主体性を育てえないではないか。仮に諸個人の問題を引き合いに出すときには、闘いの后の一定の混乱・動揺の傾向性も、きずトブル的な学生という存在に規定されていること、また、だからそのような傾向性は必然的に生活にも外化するからそれを揚棄する媒介なしには詰れないこと、等が批判の前提とならなければならないのではないだろうか。(少くともZ1まで、つまりよく使う言葉でいえば「全国で唯一」闘い抜いた人達は、即、全国で一番大切にせねばならない人達であり、表象だけみて、ノンポリや駆け出し活動家と同位相の批判をしてはならないと思う。)学生闘争が、沖縄—三里塚との連環で、Z1に至る生成過程の中で、本当に問題になったのは、感覚的にではあれ気づき語ってきたように、運動としての一歩飛躍である。だとすると、総体的な、運動そのもの、またその構造を問題にせざるをえないし、仮に諸個人の問題点をとりあげるにしても、運動構造の中でなんで思想的に解決しようとしないのか、しなかったのかということである。

かくして、次のようにいえると思う———。

まず第一に、なによりもこのような混乱・動揺の傾向は、現在の階級情勢にきわめて規定されており、革命派総体(およびその一翼として闘った我々)が現下の階級闘争の動向・全体像・歴史的位置を把えきれないという体質の反映としてあり、その現実性を突破しきれず、だから、Z1が対象化されるべき内容をはっきりともっていながらも、現下の階級闘争と連環・結合させ、どのようにプロレタリア革命過程にのぼせ、どのようにその総括作業を表現していくのかが不明瞭だった。

第二に、そのことと密接不可分に、学生闘争—Z1も革命派のもとに闘われたとするならば、階級性と科学性を革命的実践を媒介項として統一し全体性を獲得する動因である対象把握—権力問題の把握、原則的な資本主義批判—を明瞭にすること が必要であるのだが(そこから正確な情勢の分析や革命的戦術・実践が計画的・系統的に演繰できると思うし、少くとも「大道へ」の一歩はある)、それらの作業を全体化できず、我々が拠って立つ思想的立脚点や政治的内容の豊かな、言葉の真の意味での党派性、基準を獲得しえなかった。と同時に、学生闘争—Z1の正当性・意義を全一的な思想性にまで物質化ができえなかった、だから総括の環(つまり、どこから、どのような基準で整理していくのか)が見失われてしまい、総括作業は個々人の作業に任せられていくということに関し、彼我の内面性の問題化

て、プロレタリアートとその斗争およびそれらの規定要因の複雑さを全体的に把えるという弁証法的な観点を提起していること、そしてそれは「内的矛盾の展開」を媒介とするということを明らかにしていることである。さらに「対的な対立が内的な矛盾の展開を媒介とする一つの構造」の中で、一定の運動を経れば必ずたちあらわれてくるその「内的矛盾」を思想的に上向させ、「階級的本質と存在形態との対立」を醸成して、それらを「主体的原理」のほうへ引きつけ、目的意識的(この言葉の意味は既に述べた)に思想的基準を設定し、そうした過程を消きえたうえで、またふたたび「内的矛盾」や具体的諸問題に下向し、それらを思想的な問題として全体的に統合していくという、これである。「内的矛盾の展開」が決して近親憎悪的ないがみあいや善悪の二元論的単純アテハメ、また十把一からげ等々でないことは自明に了解できるだろう。さらに「内的矛盾の展開」の為の媒介として、レーニンのいう「環」ということなら、「革命の諸形態がもつ相互の矛盾を止揚する一つのあたらしい斗争形態を創出することができるようなもの」と規定しているが、ここではこれ以上触れない。

いま少しく、弁証法の立場が明らかにされたが、我々の政治的経験や獲得された政治的意識性と、運動(学生斗争—Z.1)の正当性、意又を全一的な思想性にまで物質化しようとするとき、また、運動一括把握の過程でそのようなことが問われ、それに応えきることなしには、かつて同じ運動形態では運動の進展も一歩飛躍もありえないだろうし、必然的に思想の問題—「主体的原理」として、この弁証法の立場が問い返されてくるのである。このようなことにつまでも無自覚であるのなら、運動をいくら権力や資本との「対的対立」として規定しても、それはマルクス主又の理解の負因でしかないのではないだろうか。

いま何故に、不十分を承知しつつも、弁証法ということを喚起したかというと、それは我々の運動(学生斗争—Z.1)が、革命派の利益と所Q性に規定され、またそれらに依拠しているとすれば、世界やプロレタリアートを把握し、運動を対象化し総括していくときには、このような弁証法的な立場・認識が、立場・認識一般としてではなく、不可欠であり、その過程が明確に踏まえられないならば、所Q関係がドラスティックになり所Q斗争主体が成熟するにつれ、また斗いの一定の昂揚の后、方途を共くしたり、より普遍的な継承性を明らかにしえなくなる、と考えるからである。(実際、Z.1直后の情況を想起せよ！さらに、連赤一春斗をめぐる問題を把えきれなかっただけではないか！)

我々の斗いが、たとえ小さくとも、革命派のそれとして自覚する限りにおいて、現実の世界の動向—ドラスティックな解体と再編の構造、所Q斗争主体の広さと深さの構造に対する、総体的な対象把握に規定されているのであり、決してそれから自由であったり独立したものとしてはないということ——このことがまず学生斗争の出立の際にも非常に問われたし(だから、困難ながらも、三里塚—沖縄闘争含めていろいろの試みをおこなってきたと思っている)、いま学生斗争—Z.1決戦がもたらした諸問題の整理の為の作業、総括をめぐる論争再開の場合にも、そうしたことを抜きにしては語ることはできないと思う。だから、前にZ.1以降の混乱・分裂の根拠の第一に、それが「現在の所Q情況にきわめて規定されてまり、革命派主体が現下の所Q斗争の動向を把えきることができないという本質の反映としてある云々」とコメントしたことと関連しているのだが。このことは、具体的には次のようにいえると思う。すなわち、斗いの主体には、それが現実の世界の動向から自由であったり独立していないので、不断に厳しく、現下の生きた所Q斗争が鋭く諸問題を突きつけ、「所Q的本質と存在形態の対立」を突きつけ、我々はそれらに応えること必要とされざるをえなくなるのである。もっといえば、主体的には、まだまだ総体的な「信条への立脚点」の時代ではあるが、60年代よりおしあげられた所Q斗争の地平—広さと深さの獲得として。また、敵帝国主又Brにとっては、腐朽性・寄生性の拡大と最期的あがきのあらわれとして。とりわけ、それらからみてとれる、国際主又的内容と、民主々又斗争の激成、それらをめぐる革命派主体の主体的弱さ、さらにこの主体的弱さに追車をかけた連赤問題とその評価・克服の問題、また革命派の分散・混迷と反革命的社会帝国主又潮流(代々木、革マル等)の登場——このテルミドールの時期に、運動それ自体が困難なのに、それらのことがとりわけZ.1以后、一挙的に重々しくのしかかってきたことは厳とした事実である。それらの問題が、学生斗争—Z.1決戦の諸問題の整理、総括作業にとっても、複雑多様に絡んできており、対象把握の軸—「運動における主体的原理」に関する一定の基準が踏まえられない限り、「運動の未来を代

表する」ように活動・工作・紛糾せんとする一人一人の活動家は混乱・動揺せざるをえないし、焦れば焦るほど彼我の内面性の円環構造の循環的くり返しを再生産すると思う。ただ、このような問われている諸問題に本質的(弁証法的)に応えるのを避け、一般的な反権力主義や情況主義、一般的な学生という立場にまた回帰して、運動が到達した地平から后退して再出発しようとしたり、「運動がすべてであり、究極目標は無である」という見解をとれば、逆の面では何らの問題もないのだが。しかし皮肉なことに、意図するしないにかかわらず、善意であろうとなかろうと、全一的な思想性という観点からその基準を明確にしえないとそうしたことに足元をすくわれるのである。

私の知る、2.1を担った同志諸君は、もたらされた諸問題を真摯にみつめ、それらを自らの問題として引き受け、主体的に応えようとしたからこそ、そして誰よりも、自らの実践行為と学生闘争—2.1の正当性、意義を、単に後付的な意味付与するのではなく、思想性、それも明確でより全一的なそれにまで高めあげようとして一人一人になったところで(不幸にも、2.1直后から皆んな個々人の中で考えようとして、重層的な運動構造の中で解決していく視点があいまいだった。だから、戦線は日々の情宣の場、会議はその作業の集約の場としか把えられなくいつのまにかなってしまったと思うし、学習—討論の環と発展性が見失われてきたように思う。学習は果たして個人の作業でしかないのか?)解決しようとしたからこそ、混乱・動揺・拡散という諸傾向は発生してきたのではないだろうか?

以上述べてきたことから、第二の点も出てくるであろう。この第二の点に関しては、このような問題を口に出せば最も反目や対立があったことであり、個々人としても、このような問題に対する態度なり措置の仕方もいろいろバラバラに多様であったといえるだろう。前にあげた典型的な例をみれば、それはわかるでしょう。だから、「一人一人の考え方や意識性はそれぞれ違っている」といって片づけてしまうのではなくて、問われている諸問題に対する我々の態度をどこにおくのかを一定程度確定する為にも弁証法の観点を喚起したのである。

第二の点については次のようにいえるだろう。学生闘争—2.1の過程で、獲得した一定の政治的経験や政治的意識性を、どのような内容で踏み固め、その為に必須となった思想的立脚点にどのように接近するのか、が鋭く問われた時点(すなわち運動が到達した地平)で、かってと同じ地点に回帰したり、また学生一般におし流して運動を再出発させることは、それでも確かに何かしらやれるであろうが、それは問われている問題に応えたことにはならないばかりか、とりもなおさず自ら一歩后退することであり、一度なりとも突破したものなら反動的ささえある。2.1を担った多くの同志達の混乱や拡散は、単にやる気がなくなったから去っていったのではなくて、そうした諸問題にぶっかったからこそ発生したのであり、焦れば焦る程、思想的な基準がわからないから八方ふさがりになっていったといえる。ある意味では、「落ちついていれば」、「混乱も動揺もなかったのかもしれないが、そういう人達は論外である。少くとも、直接に権力構造と対決し、不運にもブタ箱におしこめられて混乱・動揺しない人がいるだろうか。だから問題になるのは、そうした個人の混乱・動揺でさえも解決・止揚していく運動総体における総括過程である。

また、どのような観点から2.1以降の悪無限的な混乱の傾向を克服し、また、革命的にまとめていくのか、ということをめぐり、その軸・基準が明確化しえなかったことも、この一年有余の軌跡としてある。すなわち、学生闘争—2.1の正当性・意義や戦争・実践行為は、結果から一般的な意味は論られることはあっても、思想性の問題としては明らかにされることにはやぶさかだったし、全一的な思想性にまで物質化していく運動構造をもちえなかった。だから、何を媒介に第二の過程を検証していくのかという総括の環が見失われていくことになったのではないだろうか。このような総括過程も決して現実の結果の動向からも決して自由ではありえないから、系統性・全体性へと至る対象把握ということが組上にのぼらざるをえなくなるのである。果たして、我々はそのような問題を一体どのように自らのものとしてとらえ、学生闘争—2.1の全過程とそれ以后問われ続けている諸問題に本質的に応えてきたのだろうか?また、対象把握—権力問題の把握、原則的な諸本主義批判—を明確にし、そこから正確な情勢分析や実践・戦術・計画的・より系統的に演繹しようとしてきたのか?前にも述べてきたように、対象把握とは革命的実践の動因であり、それを媒介として、階級性と科学性の統一=全体性を獲得しうるのだから、一定の第二を経て、政治的経験や政治的意識性を経た后には、必然的に問題にならざるをえなくなるのではないだろうか?

もう少し具体的に2.1直后から3〜7月あたりの情況を照らして言及してみよう――。

いままで述べてきたことは、2.1以降の、とりわけ総括作業をめぐる混乱の根拠を、学ヒ斗争－2.1決戦の中からもたらされた諸問題と密接に絡めて、「主体的原理」の側に引きつけて、自らの実践行為と学ヒ斗争－2.1の正当性・意義を全一的な思想性に物質化する為の一契機として諸問題の整理と、現実の世界の動向、所以をめぐる運動を視透す為の対象把握の軸、基準に価値化せねばならないこと、またそれがほとんどできなかった、それ故に真に混乱の根拠をえぐり出すことができなかった――要約すればそうなると思うが、このことをあくまで前提にしておくことは必要だろう。「一般的だ」「客観的だ」「主体が抜けている」等の善意ある誤解をできるだけ避ける為にも。

確かに、2.1の興奮がさめやらぬ時期には、直観的にではあれ、「文脈どうりの総括」ではなく、「運動の未来を代表する実践的な総括」に向けた作業・論争の必要性が語られていた。この時期を端的に性格づければ、学ヒ斗争の一貫とした連続線上にあり、一等的に内的矛盾や諸問題が極端としてもたらされ、それを生みの苦しみに転化し応えきっていくことが問われたのであり、それを踏台に斗いの永続化に向けた諸準備のたたみかける如き設定が問われたのである。だから、多くの人達が努力し苦闘し、それ故に一つの壁にぶつかり、総体的な、つまり運動としての混乱、動揺、拡散の傾向が生み出されてきたということである。逆にいえば、2.1がなかったならば、このような情況はある意味ではなかったのかもしれない。だからといって、「2.1を誤っていた」「武器をとらなければよかった」などといってしまうのでは決してなく、2.1をめぐる斗いの中で何が問題になったのか、もたらされた諸問題にどのように応え、解決・止揚していくのか、ということが鋭く問われたのがとりもなおさずこの時期であり、学ヒ斗争－2.1、沖縄－三里塚斗争など一年間の運動を指導的に担った部分や中心的な活動家は、そのような問われた諸問題を整理し、運動の基準を明らかにし、総括をめぐる論争の土俵を設定しなくてはならなかったのである。私自身の問題としていえば、総体的な混乱や自らの思想的動揺からそうした作業をやり抜けなかったこと、またそうした傾向を切開していく軸を見失い、悪無限的な泥沼に陥んでしまったこと、そうしたことの責任性というレベルでは、一定中心的に担ってきたものとして自らの責任性を免れえない。かって共に戦斗を共有した多くの諸兄に謝罪する。しかし、本質というものは、その責任性の次元をはるかに越えたところにあるということに気づかなくてはならない。すなわち、本来踏み固めるべきものを見失い、本来なくしてはいけない最良の人達をなくした運動構造と、我々が依拠すべき思想(一的視点)をこそ問題とすべきだったのではないか？だから、夏あたり(自治会選挙－7/5)をひとつの境として明確な分岐が出来てしまっただろうし、第一回公判をめぐる時期がそれにくさびを打ち込む絶好の時期だったにも拘らずやりきれなかった。学ヒ斗争の永続化の波がいまでもあるとすれば、2.1を担った部分の大半がいないということからしても、はっきりと違う段階にはいっていると思うし、この一年間の軌跡は、学ヒ斗争－2.1の総括作業にも、公判斗争の全体化の作業にも、とりもなおさず2.1を担った一人一人にも、大きな溝をつくってしまったように思う。私が直接日常的な活動を離れて以来、戦線でその学ヒ斗争の総括作業や、溝を埋め、教訓化の作業がどのように行われているのか直接に知らないので性急な推断は避けるが、少くとも、いま意識性のレベルでもバラバラになってしまった「統一被告団」に於いてそうした作業が反映されているとはいえないだろう。しかし、一定程度の諸問題の整理、2.1以降の教訓化を「被告団」全体のものとして、あくまでも思想的な問題として、やり抜かない限り、冒頭陳述やBrに対する追求は鋭角的にやれないどころか、それ以前に去勢されてしまうような危機感を私は持っている。

ところで、2.1の戦斗は、全共斗M武装解除以降、また71年秋三里塚斗二次強制収用阻止－沖縄返還協定批准阻止斗争の直后、混迷きわめる学生戦線のみならず、革命派に結集、支持する多くの熱っぽい政治的インパクトを与え波及したし、はっきりと主体的にも客体的にも対象化すべき内容をもっていた。しかし、我々が総括作業を始めようとしたそのとき、あの連赤による銃撃戦－粛清事件が発生した。ともに、我々が革命派のいっぱしに在ることを自認して運動をやっていこうとするならば、避けることのできない問題であり、我々の思想性は未曾の厳しさをもって問われた。この時期、動心なかったのは代々木と革マルぐらいであろう。更に身近に問われた平和台－内部斗争をはじめ新たな労働運動の胎頭、春斗をメルクマールに席捲する画一な通貨労働者の斗い、三里塚青行に対する報復と

反面、ETCがZ1以降の主たる傾向であり、国際的にはベトナムの大攻勢がある。こうしたことが、我々の学生闘争－Z1の総括作業と絡めて、深いところでの不可視の結合が問われたのであり、そして4月以降、沖縄返還をめぐる攻防、狭山結審粉砕の闘い、相模原－立川－北熊本－北富士－三里塚などの労農学、急進的市民による反戦・反基地・反軍闘争の激化とともに、それらを「革命的」意味付与ではなく、どう把えていくのかという苛立ちが募り我々内部の混乱・動揺は深まっていったと思うし、それらが個々人の生活・意識に外化しだしたのもこの頃からである。また、現下の階級闘争の基調である国際主義的内容が戦後史の転換を急速に迫ったのもこの時期である。学生闘争の前夜、「ニクソンの二つの声明」により、一つの時代が終わったことは前述したが、以后、経済的にはスミソニアン体制のわずか一年半たらずの崩壊→円再切り上げ、中国問題では、国連加盟、中米会談、日中共同声明－日台条約破棄（いわゆる日中国交回復）、そして南北朝鮮赤十字会談、ディルヤリン作戦→ミュンヘン事件、さらに正規軍大攻勢→ベトナム停戦協定、とこの一年有余の間に、帝国主義の腐朽性、寄生性が危機的にまで露呈し、古界のドラスティックな解体・再編がなんと進行しつつあるのだろうか。これら現下の階級闘争の総体が突きつけている諸問題・性格をどの様に把えきっていくのか、そこから来たるべき革命の性格つまりどのような革命をおこなっていくのかを見出していくのか、そして当面する、日本プロレタリア人民と革命派にトノドえにつきつけられた「アイクチ」としてかけられた沖縄の反革命的統合＝5/15返還とその再編の要たる自衛隊派兵にどの様に対決していくのか――このような問題が突き出され、学生闘争－Z1の総括をめぐる混乱と絡み、決定的に主体の拡散・戦線の分解が「右」の方へ促進されていったと思うし、我々がZ1を全国学生闘争の頂点として革命的に打ち抜いたとするならば、単に学生から派兵へと二重写しにして闘ってはならず、先にあげた諸問題を一定把えきれてないと71年からの沖縄－三里塚－学生の闘い、Z1の戦闘を真に踏み固めたことにはならない。この時期に実践の論理が凝縮していたといえばそれまでの話しであるが。

また、学内にあっては、周知の通り、宗教部－商高廃止の問題がリアルに、ブルジョア秩序の統合・廃止・再編成というかたちで、学生強行値上げに続いてかけられてきた。もちろん、抗議の声が良心的な部分から出てきたし、確かにそれは労働者階級の民主々義闘争とは異っているにしても、すぐれてブルジョア教育秩序という資本制の奴隷的呪縛の中から噴出したものであるし、我々の数ヶ月続いた学生闘争のラディカル性に、確かに一定限界を有しつつも、刻印されていたことは明らかである。明らかに、言葉の真の意味で、民主々義闘争である。民主々義闘争という言葉を使えば、日共のいうブルジョア民主々義と同一視し変に誤解することは別にしても、そうした良心的な抗議の声に「甘い」ということもいわれた。そういうのなら、同じ学問という枠で「戦闘性」があるかないかの話しではないか、そういうことでいろんな外的な制約の中で立ち上がらんとすることを「コップの中の嵐」としてしまうのか、だったら味方になるような部分も獲得しえず自ら枠を狭めることになりはしないのか――我々は、学生闘争の永続化と大同志社社想（その手始めではないか）粉砕の橋頭堡を築く為にも、この時期（この時期ということが大切）、決起した教職員・学生、広範な支持層とともに、断固反撃をなしていかねばならなかったのではないだろうか。その中で、たとえ最初は弱々しくても、打ち鍛えていくのがレーニンのいう「社会民主々義者」の任務であろう。私自身その様に、直観的だったが、思い若干提起したことは周知であるけれども、論争を開始し闘いを物質化できなかったこと、「実践的な総括」と闘いの永続化へ向け、その契機として革命的にまとめきれなかったことは、学生闘争－Z1を闘い、その時期一定立場あったものとして、深く自己批判する必要があるし、それにしても当時何故、総体的に討論にならない程無自覚であいまいだったのか、今でもわからない。このことは、昨年11月受験料値上げ、12月学生部職員解雇であらわれた問題をみれば、なおさらであり、70～72年東大・京大の臨闘闘争の例（11/13人民と戦士の全国集会ではっきり提起を受けている。こうしたことが自らの運動として生かされていないのだ。）を教訓化し、展開していくべきだったと思う。なお、この時期にも、戦線内部の混乱・動揺が響を引き、さらに日共の登場が輸をかけていたことはあるけれども。

ちなみに、民主々又斗争のことであるが、ブルジョア民主々又に屈服するのではなく明確に区別させ、それを契機としつつも根底から問い直し、既にレーニンが「二つの戦術」として明らかにしている様に、「根本的な民主々又的要求」とか「完全な民主々又の実現」という表現を使っているが、そうした斗いの中でプロレタリアヘゲモニーを持ちこみ、「労働者階級の経済的解放のためのより高度の民主々又の形態」にまで高めあげていかねばならないのである。いま多くを語らないが、次の部分を引用する――。

「社会民主々又は、このようなすべての要求のための即時の、もっとも断固たる斗争を放棄することは決してならない――そのように放棄するのは、ブルジョアジーと反動との利益になるにすぎないであろう。まさにその反対に、社会民主々又はすべてのこれらの要求を改良主又的でなしに革命的にまとめあげ、実行しなければならない。ブルジョア的合法性の枠に固限しないで、それを破壊し、議会的行動や口さきの抗議に満足しないで、大衆を積極的な行動にひきいれ、いっさいの根本的な民主々又的要求のための斗争を、ブルジョアジーに対するプロレタリアートの直接の攻撃にまで、すなわち、ブルジョアジーを収奪する社会主又革命にまで、拡大し、激成しなければならない。」

さて、以上の傾向と関連して、「経済主又」なり組合主又およびそれらから必然的にもたらされる手工業性という傾向について簡単に触れておかねばならない。その本質は、「枠そのものが狭い」とレーニンが言い尽くしているが、そういう意味では党国主又も同じである。「枠そのものが狭い」ということは、意識が自分の枠を越えることができず、そこから生まれる行動領域の狭さ、政治的任務の狭隘化である。『何をなすべきか?』に首尾一貫としてそうした傾向の批判がなされているが、その中の次の部分は余りに教訓的である。

「経済斗争は、労働者を政府と労働者階級との関係の問題に『突きあたらせる』だけであって、したがって、どんなにわれわれが『経済斗争そのものに政治性をあたえる』任務に骨をおっても、この任務の枠内では、労働者の政治的意識を〔社会民主々又的な政治的意識の段階に〕発達させることはけっしてできないであろう。というのは、この枠そのものが狭いからである。(中略) 階級的政治的意識は、外部からしか、つまり経済斗争の外部から、労働者と雇主との関係の圏外からしか、労働者にもたらすことができない。この知識を汲みとってくることのできる唯一の分野は、すべての階級および層と国家および政府との関係の分野、すべての階級の相互関係の分野である。」

この部分は、いわゆる「外部注入論」といわれるところであるが、「経済斗争」を個別斗争や党国斗争また公判斗争に置き換えて読んでみよう。ここで「外部から」とはどう意味であろうか?すなわち、意識が自分の枠を越え、狭い枠を突破し、他の階級と結合すること、自分の行動領域の狭さを革命的理論を媒介にして主体的に飛躍したプロレタリアート独自の行動様式にまで転化させること――もっといえば、党国や「被告団」という、Bによる階級解体としての体制内化およびそれから強制された行動形態(「雇主との関係」の内部での直接的な外的な対立)と斗うことである。さて、「外から」ということを言葉の尻尾をおえば、学校教師風に教え込むという解釈になるであろう。我々は、その枠が狭いということも「外から」ということも、あくまでも思想の問題として把えねばならないのである。私自身の反省も含め、そうした枠の狭い傾向から果たして我々は自由であったであろうか――確かにそうした傾向の運動におよぼす反動性を語り、越えようとして幾多の試みをおこなってきたのだが。どのような斗い方をすれば、その為にはどのような内容の理論があれば、そうした傾向を克服しえるのか――その方途を性急に一面的、固定的にヤレコレあげつらうことは避けたいが、以下の部分は、Z,1以降の我々の総括過程を要約してはいないだろうか?

「実践的訓練が不足し、組織活動が拙劣なのは、たしかに、はじめから一貫して革命的マルクス主又の見地に立ってきた人をふくめて、われわれ全体に共通していることである。また、たしかにだれにせよ、訓練が不足しているというそれだけのことで実践家を責めることはできないだろう。しかし、『手工業性』という概念には、訓練の不足という以外に、まだ別のあるものが含まれている。総じて革命的活動全体の規模が狭いこと、このような狭い活動にもとづいてすぐれた革命家の組織が生まれるはずがないのを理解しないこと、最后に――これが肝心な点であるが――この狭さを正当化して特別の『理論』にまつりあげようと試みていること、つまり、この分野でもやはり自然発生の前に拝跪していること、これがそうである。このような試みが現われたからには、手工業性が『経済主又』に関連があること、

そして一般に『経済主義』(すなわち、マルクス主義の理論や、社会民主党の役割やその政治的任務についての狭い理解)から脱却せずには、われわれの組織活動の狭さからも脱却できないであろうことは、もはや疑いをいれない。」

「枠そのものが狭い」、「革命的活動全体の規模が狭い」という言葉の意味を把え返していく作業は、未だ「文道へ」と突き進めていけない過程にある我々「統一被告団」にとって必要だろうと思う。

なお、『何をなすべきか』に関しては、未だ整理して解説も出来ないが、多くの点で正しい視点を獲得する為に「統一被告団」全体として学び教訓化するのに意義あることではあると思う。「革命的理論なくしては革命的実践もありえない。」

3. 第二回公判闘争に向けて
――「統一被告団」と「公判闘争」の存在位置・全体像の確定の為に――

以上、まだまだ整理できないままであるが、述べてきた様に、学生闘争－Z1決戦以后の混乱・動揺・拡散の傾向の真只中に、わが「統一被告団」が結成された。と同時に、第一回公判(7/6～7/12)も残念ながらそうした情況で迎えねばならなかったし、第二回を目前にした現在も全くそうである。だからといって、性急な自己弥縫・自己批判・決意主義のタタキ売りでは、おそらく長きにわたり、かつ外的内的に複雑な問題を抱えこんで、対权力機関との対峙には有効たりえないことは弥縫してきたことである。しかし、「内的矛盾の展開」から「階級的本質と存在形態の対立」へ昇めあげ、そこからもたらされている諸問題を浮きぼりにし、整理し、また自己否定的総括をバネに再度論争を開始していくことは必須の第一歩ではないだろうか。それから、我々の手に、とりもなおさず学生闘争－Z1に注視し、公判闘争の推移を見守り、支持している多くの方々・部分に対し、この一年有余の経過を明らかにし、「統一被告団」としての宣伝・暴露を始めていき、党活過程を共有していく必要があろう。とりわけ、この一年有余の主体的な混乱の中から生み出されてきた疎外された傾向を克服し、さらに党体的に和解を強いられ「Z1なんてしらないよ」といった風潮が横行している中にあってはなおさらであり、決定的に主体的な立ち遅れはありつつも、本質的に、徹底した党活作業を我々がなしていかねば公判闘争の「勝利」の視点を失くすばかりでなく、Z1に打ち鍛えたく革命的敗北主義>の意味も解体する。そこに於いて、「統一被告団」の成立の根拠、つまり団結－同盟の内実が、既成事実の追認ということだけであってはならず、「運動における主体的原理」が明らかにされていかねばならない。まず、この点で決定的に立ち遅れている。

再三弥縫してきた様に、同大学生闘争は全国学生闘争の天王山として位置し、無期バリからZ1に至る英雄的闘いは、熱っぽい政治的インパクトをもたらし、大きく至るところに飛び火した。同時に不十分性もあったことも事実である。更に、現在の革命派党体の危機的情況を反映して、昨年から首都を中心に闘われている学生闘争は、我々のときよりも更に后退した地点で、より困難な条件の下で闘われている中にあって、多くの部分が同大学生闘争に注視し今后の公判闘争の推移を見守っている。少くとも、Bトの反動性を追求する任務はあろう。

いうまでもなく、我々は「統一被告団」の存在位置を、权力機関に強制されたものとして固定的に把えてはならず、「バリケードのどちら側に位置するのか?」を厳しく問うたZ1の戦闘行為に規定されており、その既成事実を単に追認するのではなく、その歴史的事実を契機として、革命派の下に存在位置があり、だから現在全国で無数に闘われている破防法公判を頂点とする革命派の公判闘争と不可視の結合を図るような運動の内実を獲得しなければならない。

以上が、まず第一の前提となろう。

次に、この一年有余の「統一被告団」の問題点をとりあげねばならない。学生闘争－Z1がもたらした諸問題が、前に述べた「内的矛盾の展開」として解決していくのではなしに、「混乱の助長」としてしか、だから討論をやればやる程いがみあったり動揺したり拡散が生み出されてきたのだが、存在しなかった。こうしたことに、現在に至る「統一被告団」の混迷があると思うし、もたらされた諸問題を把える個々人の意識性・視点がそれぞれバラバラになってしまい、未だそこから脱して脱部してはいない。

さらにいえば、周知のとおり、確かに憂を境にしてこの間、「被告団」の中で、私と他の諸兄とのいがみあいや反目があったことは事実です。もちろん恣意的にそうする悪意があったのでは決してなく、いまから思えば何と微視的なことだったのだろうか。Z1以后の総括をめぐる総体的な混乱が私にも反映し、問題点を全体的に把えるのではなく、部分的、固定的に把えていたことにまずある。さらに運動構造としても正しい処理の仕方、視点が明確であったともいえない。だから、こと意見の相違があれば、相互がストレートに善悪の二元的判断で反目せざるをえなくなる。とともに、一時的気分、感情にMへの関わりが左右されるという傾向が生み落されてきたといえるだろう。Mの発展に対する首尾一貫とした〈革命的現実主義〉の作風が欠けていたところに、運動構造の中で、それに生き生きとした「力と生命」を与えるように相違点をはっきりさせ、共に解決、止揚していく対立＝思想的斗いとして敷衍できなかったといえる。だから、いがみあった后は、現在のように、皆が皆、意欲性がバラバラになるのである。いがみあいはいがみあいでしかなく、思想性ということが天上に昇天してはき、転倒した中で枠をつくってしまったのである。そうした点からいえば、当時の立場に於ける私の責任性は確かに真摯に自己批判しなければならない。すなわち、学ヒ斗争－Z1決戦の凝縮された所産としての「統一被告団」の諸問題、Z1以后の戦線総体の混乱、動揺、拡散の傾向に対して、学ヒ斗争－Z1を一定中心的に担ってきた活動家の一人として、また「被告団」内の当時一定責任ある立場にあったものとして、首尾一貫とした革命的現実主義の立場から、それらの問題や傾向を思想的・実践的に克服していくという任務の放棄があり、その結果、当然のこととして「統一被告団」の団結の絆をみだし、召還主義へ至ったこと――そうした内容に於いて自己批判するものです。

そうしたことに規定されて、7月の第一回公判斗争を迎えたのだけれども、我々に、学ヒ斗争を支えた意欲性、思想性を代表する様な総括過程、諸問題の整理作業の如何なる成果をもって、それらを第一回公判斗争に反映させたのかということは全くに不明確である。確かに、3月以降の運動をそれなりに消化し、我々の周囲に「告訴団」をはじめ多くの支持者を結集せしめ、また裁判所からの人定質問を粉砕した。だが以后の公判斗争の革命的推進に向けた水路を切拓き、その結集軸なり基準を獲得しえただろうか？この間の情況を見れば明白である。このことは、いわば強制された「公判斗争」を、あの短期バリーZ1の革命的気分を持ちこみ打ち鍛えるいわば革命の練金場に転化する、そのあくまでも第一歩としては、そのことの理解の貧困の表現であり、Z1の地平からの一歩后退であるというのは言たしていいすぎであろうか？Z1の地平といえば、我々がZ1に固執するのは、来たるべき所々決戦において、きわめて「バリケードのどちら側に位置するのか？」をわがものにできたからである。このZ1の思想的表現にくらべれば、第一回公判をめぐる我々の対応は、裁判所からの「分割策動」とその手始めである人定質問という具体性に実は足元をすくわれて、獲得目標をなにかしら小さく限ったのではなかろうか？第一回に於いては、実際Z1を担った同志達を多く結集できた。それはZ1以降の混乱の中で、「公判斗争」になにかしら期待を持ったからである。我々はそれに応えきれたのか？その期待とは、我々が意気がって「公判斗争」の場でも「戦斗性」を発揮することではない。思想的に一歩飛躍し、総括過程における一歩前進であり、運動における系統性に接近することではなかっただろうか。だから、「公判斗争」に於いても、第一回と当面する第二回とにはひとつの溝があり、これを埋める必要があることを認知してかからねばならないであろう。私自身としては、以上述べてきた経緯から、第二回（一以后）に於いて、Z1を担った同志達をどれだけ結集しえるのか自信がない（このことの一つのあらわれとして、過日のZ1一周年斗争がはからずも証明してしまった）が、このことについては、私が戦線を離れて以来今日まで未だ戦線に残っている諸兄の報告を待って結論するのが正しいようである。

何事も運動として やっていくときには、いままで多くのところで述べてきたように、思想的な基準なり立脚点が媒介しえない限り、永続的な構造的なものとはなりえないのである。第一回は、いまから思えば、時期的にも、一つの絶好の革命的転機に向けた契機だったように思える。しかしそれが実質的なところ（つまり、思想的な基準や立脚点が「公判斗争」の出立には前提的に踏まえるべく必須の条件であること、第一回は蓋開けでもその物質化をやりぬく契機であること）が視えなくて、いわゆる「統一」ということに足元をすくわれてしまったようである。立ち遅れ、苦がさ

らにさらに絡まってしまったことはあるが、もう一度、当面する第二回→冒頭陳述の過程で、この一年有余の自己否定的総括を通し切り、それを バネに、共に公判斗争を斗争たらしめていく思想的基準や立脚点の一定明確化を媒介にその革命的飛躍を掌中にしていく為に、そして、どのみち私は近々学園から離れるが一点決して忘れてはならない斗いがあったことをまっとうに刻印する為に、私も、「統一被告団」も、ひとつ賭けてみる必要があろう。(その一端としてこの文章を書いている。) それでダメだったら、「統一被告団」も「公判斗争」もあきらめるだけだ。

以上が、第二の前提である。

この文章の最初から述べてきたことを一つのものとして前提的に踏まえ、我々は当面する共同の作業として《「統一被告団」内の革命的推進—「公判斗争」勝利》に向けて、問われ続けている諸問題を整理し、荒削りなイメージを浮きぼりにしなくてはならない。次に、私は「何から始めるべきか?」という問題意識を述べるつもりである。私の現在の問題意識の大部分は、1章、2章の中で大体述べてあると思うが、ここではよりスッキリとまとめていく為たちで整理しておきたい。ここで大切だと思うことは、学生斗争—2.1の正当性・意義を全一的な思想性にまで物質化していくという観点をもち、来たるべき革命の意味を問いかけ浮きぼりにし、思想的に下向し、運動として上向していくことを相互媒介として、「階級的本質と自らの存在形態」の対立をはっきりさせていき、広く革命運動に於ける「主体的原理」を、一挙的に普遍化とまでいかなくとも、徐々にみつめていきたいということである。

まず、この間、一貫して(一般性をまだ免れてはいないが)問題となっている「何故、統一を要求したのか?」ということに関して、ある程度整理しておかなければならないだろう。それは、第一回公判で、いわゆる「統一」ということが足かせになってしまい、またいわゆる「統一」ということで第二回を前にして弁護士に「忠告」し東大裁判以来の公判斗争の前例を破った(それが良い悪いは別として)経緯をもつからであり、この「統一」という問題を、単に一緒に斗ったからというだけではなくして、我々の思想性ということから明らかにしていかねば更なる混乱がじゃっ起する。我々は周知の如く当初から「統一」を断固として要求してきた。そして、第一回公判に於いては、司法権力裁判所がまさに権力をたてにとって、我々の学生斗争—2.1の内容や正当性を、それらの一般性さえも、ヤクザの出入りと同じ暴力事件のレベルにまではずかしめ、隠蔽しようとしたからこそ、少くともそうではないという一点で、「分離か統一か」の二者択一として「統一」を主張し、分離の強行としてあらわれた人定質問を粉砕し、そうした「統一」ということで弁護団をもまきこんだのである。

だが、この時点で、不十分だったと思うのは、「統一」の主張が、その思想的内実が十分に踏まえられることなく、いわば一緒に斗ったから「統一」にしなければならないというものであり、現実的には具体的な訴訟進行をあまり考えないものであった(だから弁護団がそのことをたてにとって聞き直るのだ)と思うし、いわゆる「統一」ということがひとつの足かせとなってしまい、2.1以来問われ続けてきた諸問題を俎上にのぼせる絶好の契機としての公判斗争があったことがいつのまにか忘れられてしまって、第一回公判(7.6, 7.12)が終わると意識が弛緩し彼岸化してしまったのではないだろうか。たきくいえば、東大斗争裁判も、破防法公判も、さらに連赤公判も、単に一緒に斗ったからということではなかったし、それらに一貫してみられるのは、階級性と革命精神であり、権力による手をかえ品をかえの攻撃から主体を防衛し、斗いの正当性・意義を革命の利益として共有し、その公判斗争の過程で、革命の意味を解明していくものとして斗われていることである。(ちなみに、あの日向派の「5.13斗争」にあっても、実際の裁判では幾つかのグループに分けられているが、彼らがそれでも「統一被告団」を結成しているのは、確かに党派利害もあるが、単に同じ場所で同じ時、一緒に斗ったということからだけではないようである。)我々も、確かに、国交から学大、無期バリ等を経て「2.1学生決戦」という斗いを斗った上での、つまり学生斗争の凝縮された所産としての「統一被告団」ということを考えれば、一緒に斗ったからということは否定しえないけれども、これはあくまで前提的に了解して、ここに於いて前提は前提以上のものではなく、「統一」ということを思想的な問題として踏まえ、「統一」ということは即団結—同盟の内実と密集度を問うものであるから、前記した諸公判斗争に学び、①階級性と革命精神、②革命の利益としての斗いの正当性・意義の共有、③共同の作業として、斗いの正当性・意義を全一的な思想性にまで物質化し、

革命のこと)を明晰すること、(ロ)权力による攻撃からの主体の防衛――そのだいたい4点ぐらいに絞って、我々の「統一」のイメージを確定していく必要があろう。我々がそうした観点から「統一」の把握が不十分だったとすれば、弁訟団のいう「統一」の決定的欠陥は、具体的な訴訟遂行という、革命の側からみればほんの部分、主体がBrを追撃するのに利用するにすぎないものを全面性ととり違えるところにある。彼らが良心的に革命派にシンパシィーを持っていることは評価しえるが、それならば、所Q的本質と彼らの存在形態の対立を、公判闘争の過程で明らかにすることも我々に問われるのである。最初に「弁団」といったのは、我々の側に「統一」のそうしたイメージが確定しえていなかったからであり、「統一被告団」の存在位置、全体像を遥きぼりにし、我々が覚悟を徹底化し、明確で全一的な、首尾一貫とした思想性として獲得しえたならば、たとえ具体的な訴訟遂行が少々不満なものでも、それを利用し踏台としてきっと「弁団」を転化でき、豊かな団結の質を有し、生き生きと密集した「統一被告団」を成立できうるに違いない。これまで我々は余りにも微視的であった。

いま少しく「統一」の意味に触れることができた。しかしこれではまだまだ不十分である。次に、我々は共同の作業として、「統一被告団」と「公判闘争」の存在位置、全体像を明確にしていかなければならないであろう。これが遂げえない限り、公判闘争の全過程における獲得目標や任務が一般的になったり、なにかしら小さいものに限られたり、また意識するしないに拘らず、一回一回の公判を消化することが「公判闘争」にとり違えられてしまうであろう。しかし一体、我々は文字通り何から始めるべきなの?」――――。

さて、その点に一つの視点として、いまさら私ごときがとりあげるまでもないことだが、レーニンの『革命的青年の任務』をみてみよう。あまりにも有名な、しかも短い論文なので多くの諸君が既に読んでいると思うので、不十分な箇所は指摘して欲しい――――。

「革命的感情だけでは、学生の思想的統一をつくりだすことはできない」「この目的のためには、どれかの社会主義的世界観に、しかも「明確で全一的な」世界観に「立脚した社会主義的理想が必要である」という「ストゥデント」紙の編集部の見解に、「思想上の無関心や理論上の日和見主義と原則的に手をきって、学生を革命化する手段についての問題を正しい基盤の上に置いたもの」として賛成し、「現代の学生には、反動派、無関心な人々、学生派(文化主義者)、自由主義者、エスエル派、社会民主主義者の六つのグループが存在している」。そしてこの「政治的グループ分け」は決して偶然ではなく、「彼らがインテリゲンツィアのなかでもっとも敏感な部分であるからであり、またインテリゲンツィアがインテリゲンツィアと呼ばれるわけは、彼らがもっとも意識的に、だれよりも決定的に、だれよりも正確に社会全体における所Q的利害と政治的グループ分けとの発展を反映し、表現する点にあるからである」と述べ、更に「政治的に異種の諸グループのあいだにできるだけ意識的な、首尾一貫した分界線をもうけることに努力すること」を社会民主主義者の任務としている。また、「俗流的な革命主義=エスエルの見解、すなわち「思想的統一」「革命化」に反対し、「一般的な政治運」との連帯」をさけ必傾向――「学生の中には政治的・社会的見解の点で種々さまざまなグループが存在しており、また存在せざるをえない。だから世界観の全一性と明確性を要求すると、これらのグループの一部を不可避的におしのけることになり、したがって共同の政治的攻撃力をよわめることになる」――に対し、「その実質上、社会主義的見地からブルジョア民主主義的見地へ后退せさという呼びかけにほかならない」と批判し、また「学生の一部は、明確で全一的な世界観を自分のものとしてつくりあげようとのぞんでいる。この準備活動の終局目標となりうるものは――革命運動に実践的に参加することをのぞんでいる学生にとっては――、こんにち革命家のあいだに形成された二つの傾向のうちの一つを、意識的に、きっぱりと選択することだけである」と。

そうだ、我々は71年9/16から72年2/1へと至る、確かに短いといえば短い期間ではあったが、凝縮し密集した闘いの過程で、自分を革命派の一翼として規定し、「社会民主主義者の意識性」を獲得に打ち鍛え、凝縮させ、密集させてきた。それが何故、その意識性や闘う意志が、2/1を境として拡散したのかということはまた別のところで触れるとしても、我々は「統一被告団」の位置や存在を果たしてそうした「政治的グループ分け」のどこに置いてみようとしたのだろうか。反動派や無関心派は論外としても、そして運動のなげだしのときには学生派や自由主

又者、またSR的な意識であっても、我々がそれなりに武斗を経験し、逆からいえば权力の怖さを感知してきたことを考えるならば、決して党国派や自由主又者などと同系列で語ることは出来ない。「社会民主又者」という政治的グループとして、我々は学ヒ斗争－2.1の总括をなしてき、「統一被告団」および「公判斗争」を対象化してきたのだろうか。「社会民主々又者の政治的グループ」として対象化するとは、「明确で全一的な」古界観－思想性に立脚して、「思想的統合」と「革命化」を克ちとることである。だから当然、正しい意味で厳しくなければならない。我々は「原点に帰って」どか「ミソもクソも一緒にして」とかのことばの稚拙にみごとにはまり、「意識的な、首尾一貫した分界線」をはっきりさせることなく、党国派的、自由主又的、SR的な意識を主体的に破砕、克服することなく、言葉の、真の意味での思想性（この言葉の深さを考えねばならない）に於いて非常にルーズだったように思える。我々は、当時凝縮し密集していた意識性が、この一年有余の間に、更に凝縮し密集するのではなくて、拡散していったことを把えると同時に（「更に凝縮し密集した」とか「2.1の地平を踏み固めた」という諸君は、その内容を説明してほしいと思う）、「統一被告団」の位置や全体像、性格などを対象化すべき内容を「社会民主々又者の意識性」＝目的意識性から明きらかにする必要があろう。なにも無媒介的に「対応」しようするわけではないが、現在のわが「統一被告団」にとって非常に適応するところが多いと思うし、まず我々がどこに位置するかを確認した上で具体性にすすむのもいいだろう。我々もきっぱりとレーニンのいう「社会民主々又者」のグループのはしくれであり続けよう。

以上で、「統一」の意味に触れ、「統一被告団」の現実的な立場が、ある程度うっすらと姿をあらわしてきた。次に述べようとすることは、既にこの長ったらしい拙文の中で至るところで述べていると思うので、必要性として提起しておきたい。

いうまでもなく、我々が継承、発展させ、依拠し、教訓化し、乗り超えていくものとしてある60年代の、とりわけ后半の斗いと、70年秋の斗い、そしてそれらを背景としたわが同大学ヒ斗争－2.1決战の徹底した总括を普遍化し、とりわけその「敗北」の教訓化を思想的、理論的にえぐり出していくこと、そこに於いて我々がかがものとしていくべきものとしてあるレーニンの正しい視座に接近していくこと（ちなみにレーニンよりも、近代的センスをもって登場するたとえば吉本の方にとびつこうとする諸君は、まず『1905年の革命』を読んで欲しいと思う。「教条主又」という前に、よく「教条主又」になる位まだまだレーニンの著作を読まねばならない。）――その過程を通して、踏み固めるべきものは何であったのか、何を踏み固め何が決定的に不十分だったのか、ということをあくまでも思想性の問題として投射し、①所属性と革命精神を獲得すること、②革命の利益としての斗いの正当性、意又の共有、③共同の作業として、斗いの正当性、意又をより全一的な思想性にまで物質化し、革命の意味を解明すること、これである。

そうして、どっちが先か后かというのではなく、それらを一つの統一したものとして把え、相互媒介として、思想的に下向し、運动として上向せしめていくという姿勢をとっていくことが必要であろう。

いま、軽々しく「空虚」や「決战」を叫ぶことは謹っているが、そうした言葉が再び必要となる秋（とき）を正しく把える為に、革命派共通の一貫した課題である口ミ下革命史－レーニン、ボリシェヴィズムに対して学習することはやっぱし「統一被告団」および「社研」仲々人にとっても必須の作業である。少しは教訓化の視点を把えることができ、己れを知り、古界が視えてくるからである。学ヒ斗争の時期には、我々は学園に胚をすえた学生であった訳だが、今后、労働者生产の過程に足を踏み入れたりするので、いろんな面で未知の困難性を免れないし、全員が現在斗い続けで活动している訳でもないから「新期主又」という批判もあることもあろうが、しかし、思想的に学ヒ斗争－2.1がもたらしている諸問題を整理し、普遍的な革命の意味を解明していくことが必要であろう。再び「決战」や「空虚」が合言葉になるとき、2.1当時より磨耗した仕方で、革命的無私＝破私立公の精神で政治過程に登場する為にも。

そうしたことをひとつ最大限綱領的な作业とすれば、公判斗争における最小限綱領的な作业としては、いうまでもなく、同大学ヒ斗争－2.1の地平を、全共斗M以降減退する学生Mにおける、ささやかな、しかし全く正当な正史的遺产として一点刻印させることである。その為に具体的には、教育における帝国主又再編攻撃（とりもなおさず大同志社右翼）粉砕の斗い－革命的学生Mの橋頭堡として、学ヒ斗争－2.1を対象化し、それを乗りこえるべき去

件に対し、彼々の「公判」への結集、支持を呼びかけ、学生斗争以后および今后の我々のMの報告と、Brの過去現在未来の反动性の宣伝・暴露を行っていくような「被告団通信」のようなもの(レーニンの環としての全国政治新聞に似せて)を一定恒常的に発行していくことは、いままでやれていなかったことでもあるし、今后絶対に必要なことであると思う。このようなことはあくまでも最小限綱領的な活动である。

我々は、公判斗争の全過程における獲得目標や任務をもっと「広く深い」ものにする為に、最大限綱領を神ダナから解き放たねばならない。すなわち、目的意識性の観点から、以上述べてきたことを通していくことである。

<付記>

Z.1決戦を戦斗的に斗い抜いた「同志」達、とりわけ「統一被告団」の諸兄――この一年にわたり私の意見・態度の表明を通じえなかったことに対し、真摯に自己批判すると共に、一周も二周も遅れてこのような文章を提出することを了承して欲しいと思います。この時期こういった文を出すのは非常に的はずれの気がする諸君が大半だと思うが、そのように遅れてしまったこともまた謝罪しておきたい。

しかし、この一年有余の軌跡、学生斗争―Z.1が我々に投げかけた諸問題を、敢えて非難を恐れず若干整理しようと思ったのである。もちろん、欠落している点、不十分性がないなどとは決していわないし、指摘があれば拒否する理由なんぞどこにもないと思っている。だからといって、言葉尻をとらえたり、「一般的」、「全体が抜けてる」等の批判は、またまた堂々めぐりになったり、なんらの解決ももたらさないので、やめて欲しい。我々は、共にZ.1を斗ったものとして斗争の土俵を設定することから始めねばならない。

この文章を提出しなければならないと思ったのは、時期的には昨年12月頃である。直接的には、レーニン『1905年の革命』(国民文庫)、『革命的政治革命の哲学』に触発された。モスクワ蜂起を中心とする、いわゆる1905年の革命は、単に似ているからアナロジーするというのではなく、一度は血を流して斗い、「敗北」したものが、それを徹底的に教訓化して再生していくきっぱりした立場が、レーニンという革命家の正しい視座を通して明らかにされているから、ペトログラードの「血の日曜日」が我々の中によみがえってくるのである。

たかが一片の文章で全てを語り尽せるなどとは誰彼の指摘を待つまでもなく思ってはいない。しかし、たかが一片の文章というが、Z.1を斗った諸君のそれ以后の混乱に応えるような、たかが一片の文章をこの一年有余の間に我々は提出してきただろうか？そうした大義名分をふりかざすまでもなく、少くともこのままでは「公判斗争」はやっていけない、「統一被告団」の「統一」に固執できない、Z.1を準備し斗ったころの生き生きとした雰囲気が私自身も含め総体的に失なっている、裁判所や弁護団の対応を批判する前に「公判斗争」を支える我々統一被告団総体の問題および私自身一人一人の意識性がまさにピンチだと思ったのである。「ドブル的な危機感」という人はそれでよい。しかし、いまは必ずしも足元をみなくてはならない。そして徐々に、当時の資料やパンフを出来るだけ読んで、メモとして整理していった。それを、この二月頃からまとめていったのがこの文章である。いまだ、もたらされている問題はこうなのではないか、という段階で、つっこんだ内容や解決への方途にはあまり触れる力量はいまはない。いまからあるかもわからないが、そうしたことに関しては、また徐々に作業を開始していかねばならないとは思っているが――――。内容といえば、この文章の至るところで述べている対象把握ということを物質化しえていないことはいうまでもない。だからといって、「内容」がないから、「それにかわるもの」がないから、問われ続けている諸問題を整理できないかというとそうではないと思う。我々はよく多くの点で、「転倒」して考え、アレ何先でコレが言だといって堂々めぐりを繰り返してきた。物事を一元的あるいは二元論的にみるのではなく、相互媒介として構造的に把えていくことが必要だと思うし、敢えて「何から始めるべきか？」という設問に対しては、やっぱし、学生斗争―Z.1の、依然問われ続けている諸問題の整理作業から始めるとしかいえないだろう。このことが、我々の正史的反省と下向的認識の出発点であり、それを「感性的直観」や「整理の方法」一般の抽象的な直接性とするのではなく、その正史的反省と下向的認識の過程を経て、所々の深部のサテゴ

リーに到達し、さらにロシア革命の正史を追体験して、それを我々の内在的自己否定＝再編への一契機としうると思う。

さて、学生闘争－Z1決戦を共に闘ったものの証言の主体は、闘いの実践行為に結果から一般的な意味付与や体系的な見解をなにかしら語るのではなく、闘いの実践行為と学生闘争－Z1の正当性、意志をより全一的な思想性へ物質化する作業の一過程として、またもたらされた諸問題－内的矛盾を「主体的原理」に引き寄せて展開し、いわば弁証法的な観点から解決・止揚していく一過程として、設定していくことが必要だろうと思います。

直近に迫った第二回公判闘争に向け、また冒頭陳述に向けた作業、諸問題の整理、公判闘争における追求事柄の整理などを、以上の様な立場、前提から進め切っていくことがいま問われていると思います。

まだまだ不十分性を免れえないが、最近の私の問題意識およびその凝縮の作業の開始として、この一年有余の経過を振り返り、一定程度整理し、文章化したつもりであり、それが真に問われ続けている諸問題の所在を明らかにし、それに応えているかどうかはわからない。全く皮肉にも、戦線に残っていた時期は自分でも全く混乱・動揺していた時期であり本当に一般的な意味しか言えなかったが、最近になって意識が醒めてきて、もっといえば観念の上で尖鋭化してきた。そうしたことがいいのか悪いのかは知らないが、少しは現実－思想の裂け目さも視えてきたような気がする。

この一年有余の中で、私自身の問題としても、様々な傾(偏)向に陥り、多くの誤りをも繰り返してきた。その第一は、小ブル性に対する甘えや、態度である。学生存在に規定されて、小ブル的な個人主義、自由主義的な考え方や行動形態は不断に発生するものであり、それがZ1以降の一定の総体的な混乱情況に加えたかたちで、外化し拡大してきたことは事実です。この解決、克服の仕方が、自分の焦りや苛立ちにも拘らず、「さきにわけばもっとよくみえるようになる」を転倒して甘え、だから二元論的に、ストレートに小ブル的な学生の運動をいつまでもやっていてはダメであり、どこかになにかしら小ブル的でないものがあるかのような錯覚にとりつかれ、「マルクス主義者は苦境をしばるようなことをしてはならない」ということが反対に小ブル的諸傾向に釘付けされてしまった。このようなことは、革命的現実主義の立場からいえば、決定的な誤りであり、私の立場からすれば、アレコレ欠陥を指摘するだけでは何も語ったことにはならないのであって、問われている諸問題に思想的に整理してかかることが、小ブル性を一歩克服する唯一の方法だったのではなかったのかと思う。と同時に、戦線に残っていても、小ブル的な作風・活動態度を持ちこんでしまい、問われた諸問題を整理し積極的に論争を敢行しプロレタリア革命過程に接近してではなく(それが問われていたにも拘らず)、課題を捨て、息苦しさからしか運動を支えて行けなくなってしまうという円環を繰り返していたと思います。そうしたことは私に限ったことではなかったが、Z1以前と比べると、生き生きとした雰囲気が次第に薄まっており、本来は更に深化しなければならなかったのに、そのことを考えるならば一歩後退があったように思う。

そのような私自身の「破産」を別に隠蔽しようとは思わなかったが、直に解決する道も当中にできえなかった。自分ではそれなりにあがきと格闘していたことはいえるが、自分の枠を越えることができなかった。おそらくは、少くとも共に闘ったことのある「被告団」なりの部分で「解決する道」を明らかにして欲しかったが、反対にいがみあい、反目したりすることになってしまったことは周知の通りです。

この一年間、そうした私の偏向の対極で、本来踏み固めるべきものを見失い、Z1を共有した失ってはならない多くの人達を失ってしまった。このことは、いつまでも私の中にこだわりとして残った。全国の学生闘争のバリケードがいつのまにか風化・解体していく中で、困難な諸条件の中で越冬体制から1月の学集を準備し、無期バリーZ1を担った諸君は本来ならば最良の人民の友となる人達である。そのような諸君が学生闘争－Z1の意味を把えきれずにバラバラになってしまったが、いまでもZ1を怒りを込めて振り返ることができるのだろうか。否、学生闘争－Z1や公判闘争などは忘れてくれても、いってしまえばたいしたことではない。しかし、どんなにおちぶれても革命運動まで否定するようになったのなら、我々のやってきた運動＝学生闘争－Z1のその土台そのものから徹底的に問い返していかねばならないだろう。これ以上はもはやいまの私には語れない。

この文章で述べてきたことは、あくまでも問題意識のレヴェルであり、もっといえば「観念の所産」でしかないのかもしれない。学生闘争ー2.1がもたらした諸問題の整理を始めようとした試みであり、その為にはこうしたことが必要なのではないか、ということを述べたものであり、まだまだ、諸兄の批判を待つまでもなく、実践的な解決の方途を示したものではない。しかし、この一年有余にわたる私の混乱、動揺、意識の拡散、考え方の転倒という偏向を振り返れば、ここからしか出発できないことも、また然りである。そしてもうひとつには、<怒りを込めて振り返れ>ということ ――――――。しかしまだ決定的に不十分であるようだ。一度は躓めてしまった私の意識性であるから、私の観念の浮游と行動領域から突出するには、もっともっと鋭角的で、それでいて深く創造的な思想的ー政治的インパクトが必要なようである。

言葉尻をとらえたり表象の尻尾をつかまえたりするような批判は相手にしないが、願わくば、この文章および発想そのものを根底から覆して欲しいということ、この文章が「闘争再開の出発」となり、その為のホコリだらけの叩き台としてもらえれば全く幸いであり、この文章の意図も果たされたものとする。そして、心ある批判を待ちたいと思います。

この文章化の作業がほぼ最后的段階にはいった頃、第二回公判の召喚状が送付されてきた。以上、展開してきた点をすべて踏まえた上で、もちろん諸兄の批判を受け不十分性を切開して、当面する第二回公判闘争→冒頭陳述へ向けて、総体としての立ち遅れを最大限克服し、具体的な諸作業を遂行していくつもりです。また、「統一被告団」全体の公判闘争のイメージの確定へ向けた共同の作業をも積極的にやっていきたいと思います。私の当面の合言葉は、<怒りを込めて振り返れ>である。

「こういうわけであるから、なにも時代尚早のストライキをはじめることはなかったとか、武器をとるべきではなかった」とかいう、日和見主義者がこぞってとびついた、あのプレハーノフの見解ほど、近視眼的なものはないのである。それどころか、もっと決然と、もっと精力的に、またもっと攻撃的に、武器をとるべきであった。平和的ストライキだけではどうにもならないということ、おそれを知らぬ、仮借ない武装闘争が必要だということを、大衆に説明してやるべきであった。最后に、いまやわれわれは、政治的ストライキでは不十分なことを率直に公然と承認しなければならない。そして……」

（『モスクワ蜂起の教訓』）

―― 断絶を知りてしまいしわたくしにもはやしゅったつは告げられている ――――（岩上文作）

3

'73, 4, 11

文責・

―<2.1学費決戦統一被告団>打成員

山崎 健